

344

430

殉難遺芳

菊池孝編



始



344
430

殉難遺芳

全

344-430

緒言

元治元甲子水藩ノ難ニ殉セシ志士榊原照煦氏外三百七十名ノ五
 十年祭ヲ行フニ當リ之ヲ記念センカ爲諸氏ノ遺稿ヲ編纂セント
 シ汎ク之ヲ搜索シテ茲ニ若干篇ヲ得タリ依テ殉難遺芳ト題シ之
 王名越時孝氏ノ記述セシ殉難志士五十年祭ト題スル一篇ヲ附シ
 印刷シテ冊子トナシ遺族及祭資ヲ寄贈セラレシ諸氏ニ頒_大贈_{3.6.1}
 、セリ是ニ由テ志士カ懷抱セシ所ノ雄志ト其高風トヲ窺ヒ又時
 運ノ艱難ニ處シテ事志ト違ヒ竟ニ恨ヲ吞テ死スルニ到リタル當
 時ノ情狀ヲ審ニスルコトヲ得ハ甚タ幸ナリ觀者請フ之ヲ諒セヨ

大正三年五月

甲子殉難志士五十年祭委員長

服部正義識

服部正義寄贈

殉難遺芳目次

歌之部

| | | | | | | | | | | |
|-------|--------|-------|---------|-------|-------|------|--------|------|-----|--------|
| 三木孫太夫 | 栗田八郎兵衛 | 福地政次郎 | 里見四郎左衛門 | 門奈三衛門 | 渡邊富衛門 | 谷彌次郎 | 富田三保之介 | 中山民部 | 谷鐵藏 | 榊原新左衛門 |
|-------|--------|-------|---------|-------|-------|------|--------|------|-----|--------|

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 四 | 四 | 四 | 三 | 三 | 三 | 二 | 二 | 一 | 一 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

| | | | | | | | | | | |
|-------|-----|------|-------|------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|
| 薄井十兵衛 | 林了藏 | 原熊之介 | 下野隼次郎 | 森三四郎 | 梶清次衛門 | 福地勝右衛門 | 沼田久次郎 | 眞木彦之進 | 小田部幸吉 | 三好右衛門八 |
|-------|-----|------|-------|------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 九 | 九 | 九 | 八 | 八 | 七 | 七 | 六 | 五 | 五 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

| | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|--------|-------|
| 柴田誠之介 | 綿引新八郎 | 大窪又一郎 | 須藤正之衛門 | 菊池忠衛門 | 羽部廉藏 | 野上大内藏 | 江橋五衛門 | 木村圓次郎 | 興野助九郎 | 園部俊雄 | 荻谷平八 | 木村三穂介 | 雨宮鉄三郎 |
| 二四 | 二四 | 二四 | 二四 | 二三 | 二三 | 二三 | 二三 | 二二 | 二二 | 二一 | 二一 | 二一 | 二〇 |
| 坂場小三郎 | 森山安次郎 | 立山彦藏 | 中山安藏 | 加藤忠五郎 | 住谷惣兵衛 | 根本清一 | 天野朔之介 | 袴塚安三郎 | 館野鐵太郎 | 楠橋衛門 | 永井量藏 | 阿久津敏衛門 | 神忠兵衛 |
| 二八 | 二七 | 二七 | 二七 | 二七 | 二六 | 二六 | 二六 | 二六 | 二五 | 二五 | 二五 | 二五 | 二五 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|------|--------|-------|-------|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|-------|
| 平戶喜太郎 | 金子勇次郎 | 伊藤田宮 | 成瀬廣之介 | 檜村雄之允 | 增子謙藏 | 師岡龜之介 | 太田原寅吉 | 佐野次郎九郎 | 肥田金藏 | 岡部藤介 | 床井莊三 | 大胡莊三 | 照沼平三郎 |
| 一六 | 一六 | 一五 | 一五 | 一四 | 一四 | 一三 | 一三 | 一二 | 一一 | 一一 | 一〇 | 一〇 | 一〇 |
| 倉次金次郎 | 前野謙介 | 大内誠藏 | 長谷川豊次郎 | 立花辰之介 | 大山又三郎 | 齊藤好次郎 | 池原米太郎 | 平方金五郎 | 間々田長十郎 | 淺田忠之進 | 林忠左衛門 | 佐々與衛門 | 深澤悌之進 |
| 二〇 | 二〇 | 一九 | 一九 | 一九 | 一九 | 一八 | 一八 | 一八 | 一七 | 一七 | 一七 | 一七 | 一七 |

詩文之部

新井源八郎
福地勝右衛門
下野隼次郎
綿引字八郎
林了藏
大胡聿藏
床井莊三藏
田尻新介
檜村雄之允
金子勇二郎
天野虎次郎
小田將吉

三五
三五
三五
三九
四三
四三
四三
四六
四七
四八
四九
五〇

篠本龜松
沼野井和三郎
安松晋介
淺利七次郎
黒澤覺介
興野助九郎
飯村誠介
袴塚安三郎
柏塚菊太郎
青柳健之介
菊地勝作
遠山永之介

五〇
五一
五二
五三
五三
五三
五四
五四
五四
五四
五五
五五

鈴木喜八郎
八文字傳彌
宇野恒介
鶴川忠八
箕川正遺
田山文左衛門
三田部治介
園部謙介
三田寺三八郎
堀江永太郎
藤田政五郎
大金山留吉
黒澤伊豫藏
黒澤彦七

二八
二八
二九
二九
二九
二九
三〇
三〇
三〇
三一
三一
三二

廣瀬善介
加固庄介
大賀甚藏
菌部雄藏
飯村辰五郎
安藏源二郎
松平榮次郎
跡部鉄之介
瀧田鉄之介
船橋藤介
新井源八郎

三二
三二
三三
三三
三三
三三
三四
三四
三四
三四
三五
三五

| | | | | | | | | | | |
|------|------|------|-------|------|------|-------|------|-------|-------|----|
| 中山安藏 | 立花彦藏 | 箕川正遺 | 黒澤伊豫藏 | 廣瀬善介 | 加固庄介 | 大津重三郎 | 飯村爲吉 | 床井莊三郎 | 大山又三郎 | 附録 |
| 五六 | 五六 | 五六 | 五六 | 五七 | 五七 | 五七 | 五七 | 五八 | 六〇 | 六五 |

殉難遺芳

歌の部

元治元年甲子十一月下總佐原にて幕士都築鏖太郎の請に因り人々と詠みて遣はしける

榊原 新左衛門 照煦 水戸市

君か爲思へはかくも鳴海瀉時雨にしほる袖の露けさ
 かくなりし身の行末を人とは、蘆間にすめる月とこたへむ
 端書前に同し
 谷 鐵藏 忠吉 水戸市
 我戀は人にもいはてしのふ草忍ふとすれとぬる、袖かな

辭世

人々と契りしことは渝らしな死出の山路の今日の魁
下總佐原にて都築某におくる

中山民部直義水戸市

君なくは誰かほさまし吾袖にかゝる浮世の五月雨の頃
馬といへる題にてよめる

春來れは玉野の原の朝露に草ふみ分て駒そいさめる
佐原にて都築某に遣はしける

富田三保之介知定水戸市

曇なき神の社の増鏡よきもあしきも照してそ知る
數ならぬ我身も君を思ふとて耻てふ耻を忍ふなりけり
佐原にて都築某におくりける

谷彌次郎政常水戸市

別れゆく君を送れば冬の夜の名残も惜しき山の端の月

都築某の江戸へかへる時に 渡邊 宮内衛門 進 水戸市

別れては哀れもいと、増鏡光りもくもるわか涙かな
題しらす

行末はいかゝなるらん戀衣日々に思のいろそまされる
今は唯言の葉のみを菊川の流に袖の露そ落ちそふ

梶をよめる 門奈三衛門直忠水戸市

明ぬれは又くるる日をまつ蔭の茂みを宿とふくるふのなく
題しらす

便りなき身のうき舟に山櫻ちりくる花の心ゆかしも

題不知

里見四郎左衛門親賢 水戸市

植置し若木の松の深緑過ぎし昔の色にかはらす

新樹

百敷の大内山の山さくら若葉匂ひて夏めきに覺

題不知

福地政次郎廣延 水戸市

東路の我ふる里に茜さす日和の山は忘るまそなき

花あやめ五月の雨にさそはれて今日も一ひら明日も一ひら

朝顔の歌の中に

栗田 八郎兵衛寛剛 水戸市

一夜たも花待ちとほに思ひ寐のねさめ嬉しき朝顔の花

落花

嵐山麓の道に駒とめて袖うちはらふ花のしらゆき

題しらす

三木孫太夫玄順 水戸市

一筋の糸目のもつれ今ははや繰返しても解けしとそ思ふ

辭世

吹かはる風の心の烈しさを人に知らせて散る櫻かな

落花の上野にて

三好 右衛門八長壽 水戸市

霞立つ上野の山の花さくらにきはふ人の衣手にちる

菊川にて

菊川の印の松の下露とともにおちそふ我なみたかな

述懐

小田部幸吉守本 水戸市

君か爲引そめたりし梓弓思ひいる矢のとほらさらめや
思川かゝる瀬もなき浮舟の水のまにまに流れ行く身そ

四月五日朝呼出にて出ぬるとて

眞木彦之進景嗣水戸市

去年の冬刀根の川路をまよひきて今日は如何なる旅やすらむ

述懐

大丈夫の仇にむかへる玉太刀の清き心をいやみかくなむ

幽栖

世を捨て人目を忍ふ柴の戸は雨の音さへ静けかりけり

社頭暮春

石清水神の宮居に散る花をぬさと手向て春はゆくらむ

更衣

今はとて蟬の羽衣きてみれば袂涼しき夏のよろしさ

世の中のことをおもひて 沼田久次郎泰誨水戸市

あやめ草あや珍しと見るか内にあな卯の花そ咲初めにける

思ふ事ありけるをり

刈菰の亂れし世とていつか又つかぬる人のあらぬものかは

とふにつけとはるゝにつけ近頃は世の憂き事をいはぬ日そなき

辭世

一筋に張りし心は梓弓なに弛ふへき苔の下まで

落花

福地勝衛門道遠水戸市

武士の身にも哀れとおもほゆる花散る里の春の夕暮

山吹

陸奥のしのふの里に咲出てゝいはぬ色なる山吹の花

砧

秋風の音羽の里に夜もすから哀れをそへて衣うつなり

戰場月

秋の野に鎧の袖を片敷て弓張月の影を見る哉

辭世

君か爲盡す心のます鏡くもらぬ御代の光りとやせむ

幽囚中よめる

梶 清次右衛門信基水戸市

いささらは涙くらへむ子規我も浮世に鳴かぬ日そなき

玉と見る蓮の露と世の中の人の命ははかなかりけり

辭世

森 三四郎直秀水戸市

つらしとも憂しともいはて國の爲消えなむ時を松の下露

他し所に囚はれし人を思ひて

下野半次郎遠明水戸市

梅の花咲ける軒端は變はれとも色香は共に雪をしのかむ

題不知

原 熊之介忠愛水戸市

弓取の其の習はしを御狩野に見るや昔のおきてなるらん

難波瀉世を思ふ身の夕闇に心細くも見ゆるいさり火

題知らず

林 了藏正龍水戸市

炭かまの烟は空にのほれとも赤き心の身はきえにけり

隠士出山といへる心を

足引の山里いつる人もあれな世は玉鉞の道開けたり

水雞

薄井十兵衛爲知水戸市

世に遠き竹田の里の草の庵くひなならてはとふ人そなき
寄旭述懐

我心春日の山の朝日影昔も今も變らさりけり

述懐二首

照沼平三郎成信水戸市

磯城島の大和心を磨きなは劔太刀まで曇らさらまし
霰降り鹿島の宮に木綿褌かけてそいのる賤か眞心

新樹

大胡聿藏資敬水戸市

昨日迄花に明るき山窓も若葉をくらき夏となりけり

水雞

さらぬたに夢安からぬ草枕いく夜くひなの驚かすらむ
題しらす

風に折れ浪に打たるゝ蘆の葉の憂き節許り生茂る哉

五月五日江戸へのほるをとくめられける時

床井庄三親徳水戸市

玉の緒の千千に碎くる涙ともしらてや人の我をとくむる
家を立いつるをり

なきあとの形見とそしる住あれて月もる宿の松風の音
石塚にて人々と歌よみ侍りける時

秋はいぬ紅葉はちりぬ松か枝のみさをく見する時は來に覺

辭世

玉の緒はたゆともいかて忘るへき代々に餘れる君か惠を

辭世

岡部藤介忠恒水戸市

せめてはと思ひなからの橋柱渡りもあへず朽果むとは

辭世

肥田 金藏政方 水戸市

哀れともいはむかたなき賤か身は花よりもろき朝顔の露

故郷萩

佐野 次郎九郎道綱 水戸市

古里の庭の萩むらさきぬかとふきくる秋の風にとふかな

幽居月

ささかにの糸引かけし伏屋にもすめるは同し秋の夜の月

述懐

東の間も忘れやはする磯城島の大和の道に盡すこころは

寄弓述懐

かくはかり心を張りし梓弓思ひいる矢のとほらさらめや

初春

大田原寅吉政知 水戸市

何時しかと待乳の山の梅の花匂ひなからに春はきにけり

春遠情

日の本の光りわたれる唐太の鳥のあなたも花をうゑてん

函嶺曉望

玉櫛笥箱根の山の明ほのに霞みて見えぬ伊豆の海面

囚中雜詠

師岡龜之介俊武 水戸市

異國にたくひもあらぬ櫻こそ我日の本の匂ひなりけれ

囚中元旦

世の事の絶えて聞えぬ住所にも空長閑なる春は來に覺

殘花

夏山に春の餘波を止め置きて散り残りたる遅櫻哉
蜚

吾宿の眞萩か本のきりくす夜寒を恨む聲の寂しさ
思ふことありて

村雨にしはし濁れる澤水も晴れなはやかて澄まんとそ思ふ
幽囚中作 増子謙藏唯光水戸市

怨みても甲斐やなからむ山風に吹れておつる木々のもみち葉
寄川述懐 榎村雄之允經道水戸市

武士の八十氏川の水底の清き心を知る人そなき
述懐

我君に兼て捧けし玉の緒を何惜むへき大和魂

何時迄と限り定めぬ吾身故ましてそ思ふ國の行末
辭世

秋の野の露と吾身はきえぬとも増荒武男の名をは汚さし
辭世 成瀬廣之介忠本水戸市

國の爲越えなむ人に先立て死出の山路をわれふみわけむ
囚中作 伊藤田宮友誠水戸市

先立て露と消えにし人の身を思へはやすき草枕哉
病み臥して幾日も有らぬに水鏡驚く許りうつる影かな

烈公御七回忌によめる
なき君の面影忍ふ露の身に見るも悲しき秋の夜の月

下總佐原にて都築氏におくる

金子勇二郎久維水戸市

濁行く水の流を汲分て澄すや君か心なるらん

春遠情

いかはかり霞むなるらん美吉野の吉野の奥の春の曙

更衣

今日よりは夏の衣に脱き替へて袂涼しき風を待つ哉

新竹

今年生ひの窓の吳竹千代こめて我が起伏の友と社なれ

囚中述懐

平戸喜太郎幹忠水戸市

玉鉞の直なる道を一筋にふみな違へそ大丈夫の友

劍太刀身にはきそふる大丈夫はいやときみかけ日本魂

時雨

雲間よりもるゝ夕日の影さしてやかて晴行く村時雨哉

題不知

深澤悌之進忠善水戸市

いとゝしく今日の別の惜き哉又も逢ふへき時を知らねは

雪

をちこちの山も何時しか冬枯れて今朝ふりつもる嶺の白雪

辭世

佐々與衛門成徳水戸市

君か爲誓ひし人に先立て迷ふ旅路に今やいてなん

辭世

林忠左衛門以徳水戸市

今日迄も誰か爲なれば長らへて憂き身にうきを重ねきつらむ

辭世

淺田忠之進正誼水戸市

なきあとに誰か見るらむ濁江の遂に澄むへき時なからめや
烈公七回御忌日の夜

君まささて月のみ獨見る秋の昔に似るはかなし雁鳧

寄露述懷

間々田 長十郎茂量 水戸市

淺茅生の露にひとしき身なれとも思ふ思ひはきえしと思ふ

烈公御忌日の夜月を見て

空はれて心はくもる月見かな

辭世

平方金五郎忠善 水戸市

後れしと心に思ひしかひありて死出の山路の今日の前かけ

初春

池原米 太正衛 水戸市

いつしかと待兼山の松の雪とけて縁にかへる春かな

竹間梅

吳竹の茂みか中の梅の花ひとりも春をむかへけるかな

辭世

齋藤好次郎 強 水戸市

秩父山吹おろす風の烈しさに散るは紅葉と吾となりけり

辭世

大山又三郎重義 水戸市

いさきよく散るへかりけり世の人に惜まれて社花にさりけれ

辭世

立花辰之介氏順 水戸市

君か爲死ぬる吾こそ嬉しけれ名も立花の世に薫らまし

羈中詠

長谷川 豊次郎安利 水戸市

降る雪に野山の草木うつもれて道踏迷ふ旅の空哉

辭世

大内誠藏盛言 水戸市

君か爲國の爲にと盡し來し身のいかなれば仇となりけむ

題知らず

前野謙介正義東茨城郡酒門村

吹拂ふ風の便りをいつしかと松の梢につもるしらゆき

徒らに成りにけるかな身は國の甲斐ある方に死なんと思ひし

辞世

倉次金次郎高義水戸市

徒らになりし思の悲しさを誰てふ人にかくと語らむ

月前祝

雨宮鐵三郎于丘那珂郡湊町

曇りなき御代にたとへむ秋の夜のくまなく照す月の光りを

題しらす

そよめきし庭の萩原うらかれて秋くれ方の月のさひしさ

思故郷歌

旅衣薄き袂に野分吹く夜の寒ければ家をし思ほゆ

梅遠薰

鶯の聲も及はぬ遠方の人毎かをる梅の下風

下總銚子にて竹内新六に別るゝ時

木村三穂介善道東茨城郡稻荷村

筑波山このもかのもに別れても又みなく逢はむとそ思ふ

辞世

萩谷平八義方東茨城郡下大野村

見よや人見よや心の花の露かゝる涙も皆國のため

千鳥

園部俊雄兼知水戸市

時雨ふる眞間の入江や氷りけむ波の音たえて千鳥なくなり

幕府軍尉都築鏖太郎の需に應して

興野介九郎成信 東茨城郡 小松村

浪速江のよしあし分つ君なくは枯野の霜ときえなん物を

幽囚中作

寒しとは何思ふへき守人も幾夜の霜に立あかすらむ

示建彦

吳竹の直き心を本として世をは渡れといひやおかまし
結ひ置く草の庵のえにしあらは又もきてみむ故里の月

辭世

一人りゆく死出の旅路の露けさを哀といはん人たにもなし

幽囚中よめる

木村圓次郎善雄 東茨城郡 稻荷村

春たてはいと、思ひの増鏡世の花鳥の面影もかな

題不知

江橋五衛門

東茨城郡 稱荷村

今日こそは盛の花と見ゆめれと明日の嵐のしれぬ世の中

題不知

野上大内藏義路 那珂郡 村松村

住馴れし那珂の湊の思出にうら寂しくも啼千鳥哉

辭世

ゆくさきやいつれ野末のひとつ石

述懐

羽部廉藏英廉 久慈郡 太田町

昨日今日明日香の川に有らねとも淵瀬定めぬあなう世の中
道にふる雪は道にて消ゆる也君に事ふる人も其のこと

思ふことありて

菊池忠衛門隆英 久慈郡 宮川村

奥山の老木にさけるおそ櫻今朝の嵐に花や散る亂

述懷

須藤 庄之衛門寬敷 久慈郡金郷村

刀根川の下行く水はすますともあかき心は世々になかさむ

囚中述懷

大窪又一郎光耀 多賀郡國分村

何事もいはての森の下紅葉赤き心は人やしるらん

失題

綿引新八郎經 東茨城郡西郷村

諸共にきえんと思ひし己か身に君か惠のかゝる嬉しさ

法界寺にてよめる

故里にことつてやれぬ吾ありとしらてや雁のなきてすくらむ

江戸にのほる時留別

柴田誠之介誠 多賀郡北中郷村

父母も妻も別ををしめともわれ武士の名こそをしけれ

病中作

病ある身の苦みは厭はねと心にかゝる國のゆくすゑ

幽囚中よめる

榎 忠兵衛徳滋 水戸市

富士の嶺の雪さへとくる時もあれは世の浮雲のはれすやはあらぬ

題不知

阿久津 敏衛門宗幹 水戸市

天津日の光はいつも曇らねと世の浮雲や立かくすらむ

寄月述懷囚中にてよめる

永井量 藏道信 水戸市

月影は昔なからのものなれと吾身の上は照らささりけり

題しらす

楠 橘衛門正明 那珂郡野口村

四方の山嵐にたへす散るとても赤き心をかへぬもみち葉

部田野原にて砲彈を蒙りし時

館 鐵太郎芳清 水戸市

よしや身はうけし矢玉にたふるとも何たわむへき大和魂

辭世

數ならぬ身にはあれとも國の爲盡す心は神や知ら佐武

幽居述懷

袴塚安三郎萬憲東茨城郡小松村

敷島の道ふみわくる真心をあられぬ業と誰かいふらむ

君か爲心つくくしの草枕露のゆかりに袖ぬらしつゝ

辭世

天野朔之介正命水戸市

朽もせし色も變らし武士の道に染みたる赤き心は

幽囚中よめる

根本清 一道之水戸市

あはれ身は行方しら浪漕く船のはてむ湊もなくなりけり

述懷

住谷惣兵衛弘綱水戸市

君か爲弓矢取る身のならひとて引きもかへれぬ旅もする哉

囚中よめる

加藤忠五郎忠進東茨城郡磯濱町

兼てよりかくとは知りつ國の爲今更いかて身を惜むへき

題しらす

中山安藏信孝東茨城郡渡里村

君か爲迷ふ旅路のぬれ衣をほすまもあらず五月雨の頃

旅枕夜毎戀しき故里に通ふ夢路は關守もなし

夢のうちに親にあふみの鏡山うつして見せよ老の面影

題不知

立花彦藏敬信水戸市

浮雲は嵐の風に拂はせて都に澄める月を詠めむ

述懷

森山安次郎義孝水戸市

たらちねを思ふ心のます鏡光りもくもる我か涙かな

述 懷

坂場小三郎知義 東茨城郡磯濱町

たとへ身はいつこのはてにきゆるとも神つ御國の爲に盡さん
老母をおもひて

たらちねはいかゝなりぬとおもひつゝ袖に涙のかわく日そなき

述 懷

鈴木喜太郎恭貞 東茨城郡白河村

苔の下に身は埋るともわか魂は皇御國の護りとならん

關秀彦主をおくる

八文字傳彌義高 東茨城郡白河村

君と我と別れ行くとも常陸帶又めぐりあふものと社思へ

述 懷

行先はいかになるかもしら浪のよする佃に世をおくるかな
青柳の糸のみたれをくり返しよるひるぬるゝ我袂哉

題不知

宇野常介親忠 久慈郡幸久村

夜を重ね待つともしらて時鳥いつまで山の奥になくらん
すみわひぬ菫の門の村雨にぬるゝ袖こそ涙なるらめ

春 月

鶴川忠八憲義 久慈郡依上村

詠むれば花にかすめる朧夜に匂ひ出たる春の夜の月

霞中歸雁

四方山の霞の關をおしあけて花なき里にかへるかりかね

題しらす

箕川正遺宜幹 那珂郡湊町

思ひ寐の旅路の夢はかよふなり雪ふる里の道もまよはて

題不知

田山文左衛門昌則 東茨城郡下大野村

行きて又かへる時なき身にしあれば今日の笑を永き形見に

夏 月

三田部次介正直 久慈郡太田町

久方の月の光りのさやけさに夏を忘れて夜をふかしけり

題しらす

小夜更て鳴鈴虫の聲きけは共に涙の袖にふりそふ

題不知

園部謙介知義 東茨城郡山根村

空蟬の命は露ときえぬとも只後の世に名をしとくめむ

述懐三首

三田寺 三八郎正義 東茨城郡常磐村

異國の醜双等かねきことをうけひく人のうらめしき哉
わくらはにとふ人あらは佃島浪のよるひるわふとこたへよ
ひとりのみ思へは苦し吳竹の憂節茂き世を過す身の

歸 雁

故里を思ひこし路にゆく雁の涙にくもる春の夜の空

春 夕

見し花の面影はかり身にそひて心空なる春の夕暮

家をいつるをりよめる 堀江永太郎成義 那珂郡野口村

さすらへて浮世をわたる身にも亦君か代いのる神の瑞垣

思ふことありて

草におく露の命はもろくとも思ふ心は世にきえぬやも

題しらす

藤田政五郎兼政 久慈郡依上村

見渡せば四方のもみち葉いろつきてはや二年の秋を見せけり

名所雨

大金留吉信義 久慈郡依上村

くれはとり文目もわかぬ闇の夜に獨雨聞く深草の里

述懷

増鏡清き心も世の塵にしはしうもれて暮す頃哉

題しらす

黒澤伊豫藏明一那珂郡石神村

なき身そと思ひ捨てても垂乳根を心にかけてぬ日は無りけり

題不知

黒澤彦七那珂郡石神村

我村を鎮め玉へる石神に堅き心を盟ひ來にけり

題しらす

廣瀬善介新治郡安飾村

時しあれば雪に折れ伏す庭の梅も咲きて榮ゆる春なからめや

無題

加固莊介重之新治郡佐賀村

清濁る水の流をいかにせん汲分て知る人しなかれは

述懷

大賀甚藏信綱那珂郡八里村

なき名をは何かいとはん一筋に大和の道を慕ふ身なれば
君か爲盡せる臣の眞心を誰てふ人のへたてたるらむ

失題

園部雄藏政則東茨城郡山根村

鳥を聞き花を見てしも慰ます心に春のたたぬ限りは

題不知

飯村辰五郎東茨城郡常磐村

故郷を何思ふへき旅枕國の爲には身をも惜ます

辭世

安藏源二郎義忠東茨城郡渡里村

生替り死替りても國の仇討すは止まし日本魂

池蛙

松平榮次郎信義水戸市

夕霞雨に成行く景色にて池の蛙の鳴きほふなり

浦藤

立渡る霞の袖にむらさきのあやかりかくる浦の藤なみ

池蛙

跡部鐵之介正澄水戸市

櫻川ちりて流れてゆく花をかつきなからに鳴蛙哉

河上落花

瀧田鐵之介通美水戸市

櫻ちる吉野の川の下つ瀬に嵐の後の花を見る哉

述懷

船橋藤介

東茨城郡
澤山村

君か爲世の爲おもふ賤か身の生きてかひなき浮世也覺

中秋月

新井源八郎直敬水戸市

名にしおふ秋の今宵の中空に心の限りすめる月かな

詩文之部

應命賦得弘道館梅花

新井源八郎直敬水戸市

氷雪作魂玉作肌槎牙臨水泮宮湄衆芳回避輕風夕先發東方第一枝

又

移植梅花疊舍傍氷姿冒雪吐幽香武雷神德千年遠又弄芬芳對聖堂

辭世

福地勝衛門道遠水戸市

窮通付天地道義聊相期滿襟正大氣唯有達人知

題黃菜紅梅并植有瓶中

下野隼次郎遠明水戸市

黃菜釀金幾堆浪紅梅開藥數行霞誰知微物融春氣獨入獄中慰難嗟

又

昨日淡紅且小蕾今朝蕾大盡將開漸至春光惱人節名花觸眼奈詩才

又

時屬艷陽三月春百花燦爛艷姿新鶯聲隔舍如呼客烟色逼軒欲惱人

又

身作繫囚四經月足罹痼疾一傷神廟堂裁斷知何日曲直不明氣未伸

瓶梅有意而作

玉葩冰蕊不尋常不問應知傲雪霜若有清標類花者真情一片達公堂

無題

我生四十有三年不惜死兮不惜錢何事廟堂主和議要衝總是屬腥羶

狂風篇

狂風起兮飄花否春晚傷心在狂風花飄可惜又可愛世上風光歲々同

花王特發神明國芳魂自然感英雄英雄氣象亦似花事業神速脫棘叢
桃李妖艷比小人媚風笑雨艷容工小人性質多巧詐百方構成君子窮
君子雖窮猶守道小人窮則心實訂吾輩亦如花飄風一朝大難臥獄中
翼難奮兮足難展猶似禽獸苦樊籠三年不鳴亦不蜚鳴則驚人蜚冲空
古人所言果何事吾輩至此切齒衷他日幸得冥々助一片丹心有所通
報國固不顧生死奔走敢少問西東狂風起兮飄花否為汝感慨探詩筒

失題

人報櫻花爛熳開春色十分一時來今年吾曹何不幸不見花王感慨催
去年賞花嵐山麓絕景驚目盡興回加之神京多盛事諸侯朝觀謀遠哉
天皇辱下攘夷令幾人感激愧不才爾後世態頗變更壅蔽不似昔日
盛余亦不幸罹足疾泣去京師歸水城治病未全國多難奸黨罪惡實堪

憎殺人毀家隨意行君子諫言雖少用一朝蔑焉甚無情於是支封鎮撫
命讒誣大遭奸人妨慘矣奸黨發砲拒未能入城忽擾爭從此移營各所
戰勝負紛々亦不常讒言如簧小人事遂招募兵益跳梁此際之事不忍
說正邪得失向誰彰君子道塞情難達達者如縷恐失當心情愈切從幕
意將向江都有所量中途俄囚諸侯國屢詣幕吏訊鞠場余曾始囚關宿
邑三旬又移岩槻鄉忽驚荏苒歲月新屈指百日又幾旬苦寒難厄何至
此闇室默々無所伸惟期一片忠憤氣他日必當動鬼神斯氣至死不可
屈病夫勉強猶同人時屬三月開花節幽囚慨然費吟呻中間國難是夢
幻非向花王敢縷陳一朝感慨何可默不覺贅言及此頻嗟乎花王不能
見入夢願來獄舍隣奸賊竊權何暴橫小人道長君子消禍亂一旦誰□

詠史

綿引字八郎延方水戶市

人道擎兒角且駢重華至孝本天成周旋上下猜疑際不使頑翁負賊名

花下步月

愛此春宵煙景窟金燈不用花前揭天心明鏡千象清林外白櫻萬枝發
風捲彩雲散雪稠人涉銀海衣襟醇賞心夜色兩幽閑獨恨纖河促孤月

早春偶成

林 了 藏正龍水戶市

時窮春猶至已見惠風和好是親盃酒乾坤一洗歌

失題

夜來天際雁喚夢幾回過鄉里絕音信雁乎如汝何

又

細雨斜風夜欲闌一樽獨酌滌脾肝醉來意氣無人問拔劍慳然燈下看

四〇
二月初七夜友生四五輩來訪時風雪將五更把酒談論窮古今寒
威嚴稜殆不可堪談偶至中興之時新田氏自叡嶽擁皇子北行踰
木芽嶺之事感慨四集似有千古之憤者是則時事切迫之餘所使
然處矣忽得一絕句

北風吹雪滿庭墀小集夜深啣酒卮不道山陰歸掉興却思芽嶺燒弓時

駒邸夜直感述

四更夜已靜微風吟松筠間燈照印地長棍伏等身時窮望來日事難憶
古人更聽疎鐘響時自東臺臻

湊陣中作

戰罷軍營夜五更海風蕭瑟陣雲平橫戈對客酒千榼據壘整兵礮數聲
壯氣東馳亞墨地旅魂北繞水陽城天心豈久與奸毒仰見天象轉分明

霜華如雪月如霜驛樹陰森含寒光寒威嚴稜膚欲裂此地重來堪斷腸
憶曾多士雲合日凜々精氣動穹蒼高秋慘澹雲物愁破驛悲風對夕陽
抗議動見豎毛髮忠憤難抑伏劍銑直拋身世輕點埃欲將直節扶綱常
亂臣賊子頗破膽廟議稍見除姦強君心憂勞慰且諭衆志感激一嚮方
爾後何料禍益結天步危變不易量城社狐鼠吐毒燄邊海鯨鯢恣跳梁
憂心耿耿轉如噎乃知鬼神亦悲傷猶賴乾坤正氣存祖宗神靈在帝傍
何人一揮魯陽戈護得赤日懸扶桑今夜南走望星氣天意難量何蒼茫
雄雞一聲天未明蕭條驛路無人行時聞哀鳴雲際雁一陣猶來自故鄉
右戊午十二月十九日夜奉使南上過小金驛有感發於不得已夫
今讀之猶不寒而慄矣

囚中作

春風吹兮起我懷暖煙輕霞籠天涯家山杳々知何處誰道鶯花春色催
垢面敝衣髮如蓬幽室寂寞門不開嗚呼一歌兮歌始發起坐仰首望白
日春風吹兮起我懷單身去國豈徒哉丹心耿耿只自誓憂時愧無濟時
才可憐忠盡東林士熱血空飽狼與豺嗚呼二歌兮歌難弭志業不成死
不已春風吹兮起我懷天時不違人事乖廟堂無人供天職徒使綱常委
壞頽狐鼠噉人據城社鯨鯢蹴波躍海崖嗚呼三歌兮歌轉激獨搔怒髮
向塵壁春風吹兮起我懷已將死生均塵埃螻蛄屈龍伸非人力算來大勢
何足哀猶有丹心隨形骸睥睨上下幾千載嗚呼四歌兮自堪笑逢此百
罹悔未悔春風吹兮起我懷翻憶從駕朝觀日函關濕衣蹈亂雲蓮嶽決
皆呈晴雪列藩多士誦無衣瞻仰共拜鳳凰闕嗚呼五歌兮心魂揚不覺

歌聲迸幽室春風吹兮起我懷江城何處花尤開艷靄香霧春滿眼多少
遊人迷芳埃繁絃嬌歌翻舞袖纖手搵軍爭酒盃幽閉無復繁華夢歌唇
舞影安在哉嗚呼六歌兮歌自笑烏雀吊人繞屋啼春風吹兮起我懷春
意浩蕩無際涯曲肱換得折腰苦却將義皇爲交儕睡鄉悠悠夢魂遠故
山芳樹開未開嗚呼七歌兮歌自放臥看紙鳶舞雲隈

甲子至日

大胡聿 藏資敬水戶市

去年南至上高臺與客題詩醉玉杯今日幽囚何所見滿庭落葉未開梅

囚中作

幾度經過艱苦間形容憔悴鬢毛斑丈夫功業終何事未斬群兇與百蠻

失題

床井庄 三親德水戶市

微臣聊獻野人芹巧舌何堪貝錦紋一陣哀鴻如有意天南啼渡萬重雲

失題

長策既難擬賈生清蹤亦未傲陶令天邊過雁幽窓雨惹起楚囚無限情
去歲晚冬余以事錮於忍侯之邑嘗患痔漏至是益劇乃請藩之醫
官志村謙貞治療志君先審察病之所在以刀割之內外前後隨宜
施術凡其所割不減一尺二三寸而未出二十日其愈者什而八九
志君之惠豈可諉乎乃賦一絕以贈之

快刀除毒術如神痼疾瘳來體日新不用蓬萊求藥去世間還有若茲人
囚中歲晚感慨

我既不能揮長戟以除姦邪滔天逆又不能晦跡江湖一葉輕舟從閑適
五尺小身瞻氣豪此中自存日本魄日本之魄是天稟養成實賴祖宗澤
一朝忽處國步艱難收熱血流脈々消息盈虛雖有數至情豈忍安枕席

一封章奏灑肺腑仗劍南馳十八驛欲將磔川混々水淨洗滿城氛塵跡
何圖世途如波瀾志業忽焉付一擲萬曆不察東林冤元祐更削黨人籍
赭衣對簿陳赤誠幽且囚作池鄉客故山縹緲知何處北望唯見浮雲白
富嶽摩天幾百里滄海捲沙數千尺山是最高水至深不及我心萬憂迫
回首光陰疾如箭况復明朝風物革生平心事毫未酬二十七年如一夕
愁添寒燈千緒亂夢伴斷鴻双淚瀉何時新恩得歸鄉飽看花紅與山碧

題寶船圖

君不見赫々細戈千足國威武開基立民極神聖相承萬千年聿脩其德何翼々
忽聞海中有一洲財貨充實風土優資之豈無益我民龍舟直指三韓州
三韓王是日本犬皇化洋々殊域展舟揖不乾致朝貢珍寶奇貨千車輾
豈管財物溢寰區更傳唐虞三代謨資其教以贊我道文質彬彬復何需

生民既浴無窮澤朝觀謳歌滿市陌爾來二千五百載丹青傳績揭屋壁
妙手弄筆極媚嬋神功溢紙猶凜然對此再拜欽遺烈古風聊賦寶船篇

囚中作

田尻新

介知好

那珂田谷村

舉世難分紫奪朱遂教利口覆邦家雄刀無奈奸臣舌忍見綱常亂若麻

醫生某携櫻花一枝而見意欣然久之得一絕

芳艷粲々玉一枝々々乃足慰幽思幽思幸得題花月好向窓前謝老醫

從關宿移岩槻舟中作

自羞男子志難伸報國無如縲繼身刀水江頭幽窓底家山入夢屢傷神

失題

暗室蕭然值暮春世途依舊未知新苟安久誤廟堂策憂憤空勞草莽人
報國自憐難達志思親誰識易傷神壯心枉屈幽窓下仰對蒼天氣欲伸

從關宿移岩槻舟中作

嚴冬臍月風凜烈曉辭關宿向武州拘囚桎梏渡刀水刀水風浪欲漂舟
身世落魄真可憐遷謫何堪萬里愁行見芙蓉峯上雪突兀貫天聳千秋
一望超然神魂揚何日翱翔期仙遊岩槻城外日欲暮四顧雲烟共悠悠
已投九死一生地斷鴻似訴囚人憂々國思親情難遣不覺帳然血淚流
君不見男兒四方志半生空磨三尺刀千歲遺恨向誰語爲鬼欲斷奸臣
頭

幽居有感

檜村雄之

允經道

水戶市

廟堂何事苟安策誰識豺狼無厭求願待他時挽回日雄刀飽染虜酋頭

又

奸邪自古忘名義可惡一朝釀國危身世縱令委霜刃好將熱血灑洋夷

辭世

姦臣擅命殺忠烈義氣不伸泣鬼神嗚呼今吾為邦死七生誓戮佞邪人

幽居有感

歲月蹉跎屈幽處羈愁無奈憶君親雄刀難試奸諛首意氣欲清胡虜塵
紅淚空咽歎時運丹心不用患沉淪人生辛苦何足道許國從來忘此身

囚中作

金子勇二郎久維 水戶市

殺氣衝天日沒光颶風捲地驕長鯨彗星屢見地亦震天意鄭重示禍殃
誰知霸府苟安策遂使世道屬榛荆祖宗大典一朝廢欺誣上下稱大平
巨艦大舶蔽邊海虜館棟莖各處營西東互市逐日盛商賈趨利農廢耕
回首都門繁華子多是夢死兼醉生不問存亡關家國恬然相誇一朝榮
一朝榮利自安息黃金甚重天下輕策論滿胸百無用空使英雄對兜甌

神州自有三眼在此名恐是為闇盲君不見窮髮之北千島境目凹鼻凸
事驕逞又不見西海孤立對馬島巨砲轟天勢縱橫今日神州警大厦傾
覆殆如一木撐聖明賴有萬乘尊羽翼况復名公卿雄威依舊愈赫々乾
網坤維益恢張可歎關左簇鴟鴞俊英晦跡鳳無聲文恬武瀝衰頽甚不
識何人胸蓄兵勿謂衰運回不得八州義氣嚮皇京嗟乎常陸地雖小勇
武又見兵備成此地元稱日出處闔州志氣方崢嶸一藩偏仰政教美寧
思一朝黨議萌無奈忠良罹讒誅中興大業難每昌思之憂心獨鬱勃迺
遭無路陳幽情陋窮猶重君臣義一死誓留忠義名今日若能奉
鳳詔未晚雄威四海轟尊攘大典立脩舉要將赤手振綱常此心一發誓
天地豈論此身昇中烹何當逆焰披拂去遍使八紘仰扶桑

囚中作

天野虎次郎 拾 水戶市

多少離情夢裏休
慈親膝下問安不
杜鵑啼破囚窓睡
添得胸間一段愁

囚中作

小田將吉朝信

水戶市

盡瘁誓期攘醜夷
此身幾蹈薄冰危
幽囚縱負國恩渥
寸志豈無天地知

囚中作

篠本龜松寬

水戶市

慨歎緣底事
世體與人情
今闕尊攘義
古羞胡羯盟
細戈不精銳
三眼失光明
憂憤無由訴
天涯望帝京

又

世事悲辛不勝論
忍聞氛祲拂天關
寄言慷慨勤王士
莫以安危勞至尊

慶應二丙寅仲冬於忍城囚窓之下

君不見那珂之湊
干戈時陳營僅屯
二千師又不見部
田野之原酣戰日
賊軍如簇不難支
我軍精銳森列隊
曉天直指賊壘之
雲耶烟耶將花耶

松間飄風是旌旗
巨礮破裂雷聲疾
小銃齊發雨脚馳
轟天動地白日暗
精甲縱橫見機移
不知賊將姓誰某
田間墜馬膽氣褫
左手握弓背負箠
齷齪呼僕舉手麾
鐵馬一蹶陷泥淖
顧主振鬣又似悲
敵將狼狽已如此
不論走卒貽醜姿
將卒猶是排稻逃
纏足難前步遲々
躍然飛來貌貅士
長槍飛光呼噪追
全勝既已在我軍
一任腥風捲地吹
我友雪渚河西氏
妙筆入神巧相施
縱橫寫得宛如真
使人怒髮粟生肌
吾儕今日對此畫
回顧往事淚交頤
拈筆聊賦欲陳跡
心緒冗長奈難羈

忍城幽囚中雜吟

沼野井和三郎維和

水戶市

無非無是又無功
慷慨空存膽氣雄
自笑莊周會所說
不材之木我相同

又

四十餘年忘此身
天恩欲報幾悲辛
是非成敗何須問
百鍊鐵腸磨不磷

絕命詞

安松晋介重德 水戸市

夙期報國出人先辛苦幾侵生死邊可恨功名終一蹶悠悠心事付蒼天

又

心事賴歡同社知鴻毛一死曷須悲九原別有難瞑處慈母家山鶴髮垂

囚中作

淺利七次郎 健 水戸市

身在天涯音信絕羈囚難奈故園情三更夢覺無人語風送隣窓拱子聲

聞笛

淡月一痕梅幾株花香月影兩相宜不知何處吹橫笛梅落月沈總不知

囚中作

微軀嘗抱杞人憂蹤跡萍蓬爲楚囚圖裏既看新戰國眼中不似舊神州
風雲入夢空添恨書卷伴痾還惹愁又遇悲秋三五夕衣衾唯有涕泗流

又

聞說烽烟連海濱誰陳奇策靜風塵異鄉萬里幽囚客苦雨三更多病身
黠鼠侮人跳屋棟妖梟得意叫城闈感來好灑憂時淚欲取丹心質鬼神

囚中作

黑澤覺介 成憲 那珂郡 石神村

爲子爲臣期孝忠豈圖忠孝誤茲躬討奸夙志雖難遂報國赤心豈有窮
仰對旻天憂世態俯緝編籍泣英雄男兒至此空惆悵誓要扶桑培養功

失題

興野助九郎 成信 東茨城郡 小松村

平生只愛酒不讀古人書詩賦非吾願何須作陋儒

囚中作

飯村誠介 時敏 水戸市

易箒將行黃壤下改衣再拜白雲東真心誓要掃夷戎此日却憂起內訌
蹈破人情倒瀾險冒來官海怒濤風自甘十死一生境誰識千愁萬苦躬

唯有南窓梅蕾綻暗香時放謫居中

幽居逢端午

袴塚安三郎萬憲

水戶市

遷謫由來已二年瘦顏蓬髮有誰憐今朝又是遭重午懷古思鄉轉慨然

秋夜偶成

柏 菊太郎信俊

水戶市

梧桐一葉逐風輕秋氣稜々夜色清燈影々微眠不就蕭條只聽過雁聲

囚中作

青柳健之介庸德

水戶市

慷慨忍言東海濱衆兵窺襲義雄屯軍門放火衝天起砦壘礮聲奮地頻壯士致身尤憤激老臣屈膝幾酸辛豈惟今日爲囚客暗屋屢懷君與親

囚中作

菊地勝作道貫

多賀郡坂上村

一別如流三四年苦身契澗有誰憐要使神風攘醜賊雪得君宛拜青天又

幽人有待夢還空報國男兒氣自雄一片丹心磨不盡百般端緒在茲中

聞雁

遠山永之介

水戶市

獨對殘燈坐牖前破蕉風戰更凄然數行過雁何邊去冷月吐霜五夜天

思鄉

三歲光陰若駛流幽囚空在筑陀洲家鄉爺母無恙否夜々魂飛蒜水頭

述懷

義氣從容輕戰危謫居薄命我何悲唯愁今日神州事何日揮刀屠醜夷

秋雨思鄉

中山安藏信孝

東茨城郡渡里村

客舍凄然秋色空霏々細雨滴梧桐故園千里無消息獨倚窓前聽渡鴻

述懷

半生零落幾傷心皇國道爲荆棘侵一任浮雲天定後菲言偏在安宸襟

囚中作

立花彥藏敬信 水戶市

多年辛苦煉丹精欲拂戎夷猶未成何事幽囚千里客君恩難報水陽城

春日有感

箕川正遺 宜幹 那珂郡

江塘楊柳媚東風映水櫻花含笑紅正識故園多逸興可憐身是任飄蓬

幽居惜春

萬頃白波佃島邊漁舟杳々幾帆懸客情最恨春風老閑愛孤雲轉偶然

除夜

黑澤伊豫藏明一 那珂郡
石神村

竄謫正飄泊悠悠絕世塵光陰如矢去明日又逢春

春夜思友人

一片月光照草茅落花如霰竹窓敲夜深默坐孤燈下低首無端憶舊交

梅雨

梅林密々鎖雲烟閣々鳴蛙池柵邊幽室蕭森敝袍濕不教囚客就閑眠
暮春幽居口號

花落春將去紛紛傷客魂故山瞻望迥孤鳥煙雨昏竄謫無家信三年苦
籠絆素意聊難達何時雪沈寃

述懷

廣瀨善介 新治郡
安飾村

懷古憂今感慨深幾年報國碎丹心奸回邪謀縱私慾空使忠臣禁錮沈

謫居午晚

加固庄介 新治郡
佐賀村

奔雷送雨洗幽齋松籟吹涼拂玉階亭午夢魂思千里醒來慘澹動愁懷

客舍聽子規

大津重三郎 信重 東茨城郡
山根村

青山殘月海天分樹深輕烟萬里雲杜宇一聲驚客夢幽窓歌枕不堪聞

囚中作

飯村爲吉純之 東茨城郡
吉田村

去秋鼙鼓地自訴爲幽囚周歲命無恙何時報國讐

客舍聞鵲

客中眠易覺夜々杜鵑聲却起歸鄉意寄誰話此情

偶成

萬里天涯雁一行月中回首淚沾裳不堪惆悵無消息夜々旅魂繞水陽

筑陀春事

雨後風和春色新潮乾沙岸步清濱看來滄海千帆影總入吟眸忘苦辛

不如意齋記

床井莊三親德 水戶市

全與同難諸子鋼於忍候之邑足不出戶庭者數旬嘗患痔漏至是益劇
僅能跛步監吏憐焉設別室以居之余乃名其所居曰不如意蓋我友崑
岡根本子所命也人或難之曰古之君子居易以俟命故素貧賤行乎貧

賤素患難行乎患難無入而不自得焉且忍候之遇子者至矣凡其百求
無一不如意而以不如意命之無乃不可乎余曰不然君子之仕也固欲
以行其道也處阨窮流離之際而優游自得者豈其情也哉則不如意之
所以爲不如意彼與我固無以異夫余志狂而才踈甘蹈危機而無分寸
之補其不如意一也處有爲之世而屈於一室之中激勃礫柯之氣愈窮
而愈昂其不如意二也身嬰沈痾坐臥不由已僅保餘喘於牀蓐之上其
不如意三也凡其持身處事技梧蹉跌寸進而尺退其不如意四也以四
不如意之身處百不如意之世則齋之爲不如意不亦宜乎或又曰吁是
意之說乃得聞命矣然是皆人之所同而子獨名其室未知可也曰吁是
何言也余特以生平之事名之耳何知其他則人之見之以爲得意乎以
爲不如意乎他人之論固非不如意齋之所與余將居不如意齋反以求

諸心安身立命以醫其不如意者也遂書以爲之說云

大山又三郎勝重 水戸市

頑兒勝重血泣漣々謹而申上候勝重幼少より頑純無智にして得寢食之養候事常の兒より長しと奉存候而今年に至候迄御報仕候事毛頭無御座候然る處又々様之念を萌候事誠に以て恐多く不孝不弟之罪天地の外迄餘り候とは存候得共勝重謹而惟に方今の形勢徳川家の安危に係るのみならず實に神州之存亡此時と奉存候今春從公駕上京せしより今日に至る迄醜虜陸陵形勢の變易幾回なる事を知らず聖天日夜此事を憂ひ給ひて恐れ多くも自ら神祠に祈せられ候事數度有之のみならず時々諸臣に諭せられ候得共諸臣苟安之念御座候て鞠躬盡瘁斃而休の人なく誠に可歎也如何そ

當路の人不感慨哉然とも此事言にたらず幕府の官吏醜虜と泥み勢滔々返而聖天子を癡せんと欲するに至る天下之有士誰か切齒扼腕是に次に血涙を以てせさらむや此頃長州侯醜虜を打拂ひ候得共是又一時之勢にして醜虜窺審の念を斷候には不至と奉存候然とも攘夷之先魁誠に可羨事に御座候源烈公深く醜虜を憂ひて尊攘の教を發し正氣を挽回の念一日も撓せられず然る處不幸にましくて終に天年を終せられ候事邦家の不幸のみならず實に天下の不幸と奉存候今年上公御上京被遊天盃并に御大刀御手自ら拜領關東御目代の御重任被仰付候處御下りに相成候而は恐多くも御因循被遊候而偶然時日を送らせられ候事故志士一同呈書歎願等仕候得共御用ひ無之御因循被遊候事無餘儀事有之歎は不

存候得共天下の勢ひ一旦蹉跌候節は日本忽土崩瓦解爲醜虜赫々たる神州を奪候半も難計御座候此時に至而誰か聖天子を助奉り先公尊攘之教を明にし醜虜を拂ひ神州の大耻を雪くものあらむや勝重一念此に至而身生の難苦を知らず只神州の正氣を挽回するを思計に御座候伏而願は勝重御暇被下已に死候者と被思召候へは勝重の悦無此上と奉存候吉田矩方有言曰不幸の子只慈父愛之不弟の弟只友兄憐之如勝重は不孝不弟實に此上無き者と奉存候然りと雖とも日本數千年來萬代一世赫々たるを今爲醜虜欲奪勝重一念の發する處實に神州之爲にして私のする處にあらず故に不孝不弟之罪を御許有之候て一念の發する處を遂候様にとならは誠に以而難有事に御座候已に明朝水陽を發し身を萬里之海

山に放候間今世の御文通も是迄と恭しく呈一紙候血泣漣々不能
清書勝重謹而白す百拜頓首

文久三年癸亥六月十五日夜

御父様
御兄様

勝重

附

錄

殉難遺芳附録

いはらき(新聞)より掲載す

殉難志士五十年祭

名 越 時 孝

元治甲子の難に殉じたる水戸故執政榊原新左衛門初め三百七十餘名の志士に對する五十年祭は本月二十六日を以て常磐原の墳前に舉行せられんとす、抑も甲子の事變たるや頗る紛糾錯雜せるものあり五十年後の今日、世人或は之を了解せざるものあるべし、因りて聊か我が知れる所の史實に據りて今昔の感想を述べ以て追弔の意を表せんとす、但言或は論評に涉り忌諱に觸ることなきを保せず然れども隔世既に五十年前の事たり故に歴史上の事として論じ諸名士に對しても敢て尊稱を用ゐず姓名或は略稱を用ゐるべし

若しも五十年前に水戸を去りたる人あり杳として消息を通せず今飄然歸り來りて水戸停車場に着したりと假定せよ、彼れが心目に映ずる所のもの果して如何、水戸の城址は尙幾分の舊形を存ずと雖も當年士大夫の弟宅は今何くにある、銀杏坂は豁然開鑿され舊外郭を貫通せる大道は直に南町に達すべく當年森鬱たる陵谷は今や市店櫛比して阿萬狐も跡を潜むべき餘地なく算し來れば事物の變化、實に隔世の感あるべし。

然しながら是れ僅かに地形上の小變化のみ若し夫れ人事盛衰の轉變を觀ば果して如何の感がある水戸の土地は偏小なりと雖も、水戸の物資は缺乏なりしと雖も當年の水戸は海内を風靡し列藩諸

侯の欽式せし所なりき、全國の趨向を指導すべき儀標的名藩たりき、將た其の末葉元治甲子の交に至ると雖も尙少なくも中原の均衡上何れにか輕重を爲すべき重力を有したりき、然るに五十年後たる今日の水戸は如何、政事上に、學術上に、將た實業に工藝に、何れの方面より觀るも水戸の名稱は全く世間より忘却せられしにあらざるや、五十年前の水戸は斯くも赫々たる大勢力の水戸なりき、五十年後の水戸は唯歴史上に存せる過去の水戸のみ、歸來の客、果して如何の感をかならず、是に於て何故に然るかとの疑問は必然湧起し來るべし、而して之に對する世人の答解は大抵之を藩末の慘劇に歸するものと如し是れ果して然るか否か、假し果して然るとするも唯これのみにて首肯し得るか余は其の然るを知ると同時に尙其の然る所以を問ふの必要を感ぜざるを得ざるなり、何となれば此の事實は單に斯の如く然りといふを以て足れりとせず其の然る所以の理由なる可らざればなり。

抑も藩末の慘劇は何に由りて然りしか嘗に思へ甲子事件に死せし志士義民幾千百人、彼れ豈徒らに黨争の爲めに死に就く者ならんや彼れ幾千百人の死に就きし心は幾千百人に幾千百乗せる事情の存するものなくはあらず、若し彼等志士各個人に就て之を問はんか、彼れ志士各個人は皆各幾多の意見あり幾多の議論あり、苦心奔走、血涙潜然、萬已むを得ざる場合に際會して斯の如き最後を遂げたるなり是れ後人の深く察せざる可らざる所ならずや、余は水戸藩末の史に於て悲風の颯颯たるを感じ轉た感涙を禁ずること能はざるものあり、今や殉難志士五十年祭の舉あるに就き今昔の感を陳ぶるの已むを得ざる所以なり。

元治甲子戰亂の結果は翌慶應元年乙丑の慘刑と爲りぬ、即ち今より五十年前に於て水戸の故執政榊原新左衛門を初めとして三百七十餘名の志士が死に就きたるは之れが爲めなり、此の悲慘の最後を遂ぐるに至りたる以所のもの豈幾多の原因なくして然らんや豈又幾多の結果なくして已まんや。

凡そ何事を爲すにも其の功を收むるには多少の犠牲を拂はざるべからず、明治維新は數百年來の武門政治を一新して王政復古の大業を建てたる偉績なり、此の大業を建てるまでには幾多の犠牲を供するは已むを得ざる所なり、水戸閩藩の國家に貢献したるは即ち全く此の犠牲に供したるなり、而して榊原初め幾多志士の慘死は即ち其の大部分たるなり、然らば即ち其の死は實に悲慘の極なりと雖も是れ維新の大業を收むる徑路に於て已むを得ざる所たるなり、五十年後の今日之を祭るは後死者並に遺族富然の務にして余は殊に之を祝祭といはんと欲するなり、何故に之を祝祭といふや今に至りて其の精神の達したるを祝せんとするなり世人は往々水戸の犠牲のみ多大にして其の功を收むること少なきを遺憾とする者あり然れども是れ志士を誤解する者の言のみなるほど今人の思想よりすれば斯くもいふべけれども當年志士の精神は豈斯くの如き打算的のものならんや、彼等の精神は實に純潔なる盡忠報國に在りしなり故に苟くも其の精神にして達せんか彼等は悲慘の最後をけたりと雖も必ず欣然笑を含みて地下に瞑するなるべし彼豈贈位の有無を問ふ者ならんや。

夫れ明治維新、王室の隆盛を致したるは即ち彼等志士が勤王精忠の志望の達したるものに非ずや、

二十七八年、三十七八年の二大戦役に大捷を奏したるは豈當年攘夷の精神の發したるものに非ずや、凡そ事の成るは成るの時に成るに非ず必ず由りて來る所あり當年志士の懷抱せし尊攘の志は其の形に於てこそ異同もあれ其の精神に至りては全く茲に貫達したるものと謂ふべし、彼れか精神既に貫達す即ち其の満足は如何や、余は固く信ず彼等の志たる全く盡忠報國に在り之が犠牲たるは固より甘ずる所なり、苟くも其の精神にして貫達せば又何をか求めん名利地位彼れに於て何かあらん、豈他の殊遇厚俸を受けて尙足れりとせず更に其の地位公器を利用して私慾を逞ふする如き醜類輩と世を同くして論ずべけんや是れ余が彼れ志士の悲惨なる最後を追懐しつゝ尙ほ之を祝祭といはんとする所以なり。

然れども是れ其の結果に就て言ふのみ若し夫れ彼等が斯く悲惨の最後を遂ぐるに至りし事情並に其の原因に至りては豈又幾多の曲折ならんや、請ふ嘗みに之を陳べん。

元治甲子の戦亂は實に慘憺たる悲哀の歴史なり世人が水戸藩末の悲憤に酸鼻する所のもの即ち是なり嗚呼此の悲惨の歴史今さら之を語るさへ悚然たらざるを得ざるなり、抑も是れ何に由りて然るか。

今之れが原因を尋ねれば固より多端ならざるを得ず、然れども其の根原の一は水戸の地位立場として他の外様大名、即ち外藩薩長の徒と同じからざることは是れなり、即ち幕府に對して本支離るべからざる關係あること其の第一因たるなり、若し此の義を詳にせずして徒らに勝敗利害の打算の上より論じなば彼れ殉國の志士は決して地下に瞑すること能はざるべし由來維新後に於て史上

より論ずる者は勤王といへば輒ち幕府を討伐せし者を首功とし、勤王即ち討幕、討幕即ち勤王といふ如き見地より立論すれども實際當時の志士が執りたる所は斯くの如きものに非るなり、是れ其の苦心慘憺たる所以なり、況や水戸の如きは幕府と本支の關係あり縱令時局に對して慷慨憤激し國家の上よりは私情を去りて所謂大義滅親といへる窮極の場合に際するまでも水戸藩として討幕といふ如きは忍ぶべき義に非るなり是れ嘗て勅諭事件に際し宿儒會澤恒藏が心肝を碎きて切論し義朝と爲義との例に鑒みて宗家に反くべからざることを立論せし所以、將た之れが反對の地に立ちたる志士の首領金子孫二郎の辭世にも「二荒の神もみそなはすらむ」と歎ひし所以なり是れ水戸の立場として勤王の舉に關する根本問題にて頗る困難を極むる所苦心を重ねる所、外藩諸侯の討幕を憚らざる者とは實に異なる所なり。

若しも外様大名、即ち薩長諸藩の地に在らしめば幕府に反すると否とは力の問題なり勝敗利害の問題なり、此の他に何の關係があらん誠に氣樂の事業なり、水戸は即ち然らず、幕府は水戸の本宗なり水戸は幕府の支流なり即ち本支親子の關係あるなり父、父たらずと雖も子、子たらざるべからざるなり、然れども君臣の大義よりすれば我が主君は天子なり、天子は我が本支共に主君と仰ぐ所なり、是に於て朝廷と幕府と衝突を生じたる場合には進退維谷を免れず、即ち父子の親、君臣の義、情義兩全なり難き場合に議論の紛糾するば當然なり、水戸の勤王豈討幕を謂はんや、水戸の佐幕、豈勤王の義を無視せんや、時勢に緩急あり、議論に硬軟あり、而して幾多の事情此の間に紛錯す、分黨爭軋、水火相容れざるに至る、水戸藩末の慘劇、言豈容易ならんや嗚呼甲子

の戦亂、悲惨の末路、其の原因の一は此の點より出發したるに非ずや、夫れ死は一なり然かも同じく國事に死せし中にも此の紛錯せる時局に當り疑似の間に進退の節を争ひ宛を吞み志を齎らして死に就きたる榊原初め幾多名士の心中實に想察するだに苦忠の限り、悲惨の極みなり。

榊原新左衛門初め幾多の志士が尊王攘夷の大義に仗りて運動したるに拘はらず遂に幕府に敵抗する者に非ずと告げ陳情辯疏して從容命を待ちたるは何ぞや是れ前に言へる如く水戸の立場として進退然らざるを得ざるものあればなり。

若しも彼等をして他の外藩志士の如く幕府と無關係の地にあらしめば、將た真に討幕を敢てする者ならしめば、即ち其の活動は花々敷ものありしなるべし、果して水戸の藩力を擧げて猛然直に尊攘の擧に出でしめば、維新の業は鳥羽伏見の開戦を待たず早く既に甲子の戦に功を收めしやも知るべからざるなり、假しさてに奏功せざるものとするも彼れ榊原を初め富田三保之介、福地政次郎等の諸將並に一方には武田伊賀守、山國兵部等の諸將をして討幕を辭せざる決心に出でしめば其の戰略といひ兵力といひ決して那珂湊の擧の如きに止まらざりしなるべし尙又一歩を譲り彼等が武運拙くして戦死したりとするも其の最後は實に目覺ましき壯烈の擧たるを失はざりしなるべし然るに彼等幾多の志士の取りたる所は斯かる利害得失の打算には出でざりしなり、彼等の志は洵に尊王攘夷にあり則ち上は朝旨を奉行し下は輿論に順應し心力を盡して之を貫徹せんと欲しとなり、然れども彼等は之を貫徹する順序に於て我が本宗たる幕府を外にすることを爲さず則ち何處までも幕府を苦諫して此の正道を實行せしめんことを努めたるなり而して此の律義なる武士

道を履みたる結果は反對に意外の破目に陥りて其の志を達すること能はず遂に心ならざる戦争を餘儀なくせられ反りて斬首と爲り死罪と爲り畢りたるなり宛なる哉。

さはあれ那珂湊の戦争は天晴なる勝戦なりさ彼れ幕府か田沼玄蕃頭を總督として關東陸奥十數藩の兵力を集中し彈丸黒子の那珂湊を包圍し海上よりは軍艦を以て砲撃せしにも拘はらず我が志士の兵力は屹然として屈せず殊に部田野の原に於ける最後二回の大戦の如きは彼の十倍の敵兵を撃破して悉く敗退せしめ我が地利の不可なるに拘はらず我が兵器糧食の不十分なるにも拘はらず、遂に彼をして遂巡躊躇、持久重圍の外なきに至らしめたり是れ他なし武勇卓絶なる水戸武士の腕前は戦に臨みて勇往無前、毎に邀撃突進を以て勝を制し目にあまる大敵をもとせず枯を振ひ朽を拉ぐが如き勢を示したるなり。

余は敢て茲に戦史を叙するものに非らず唯議論の引證として彼等志士の實力の一端を擧げたるのみ此等の戦記に關しては志士の書類往々參考すべきものあり殊に那珂湊々隊の幹部に在りし福地政次郎の筆記の如きは尤も事情の參考すべきものあり余は世人が斯かる志士の名著をも展讀せず將た彼等苦心の跡をも討尋する者少なく彼れ英雄心血の痕を空しく杳茫に付し去るを悲むなり。前段所論に付ては讀者或は疑を挿みて言はん水戸の志士は幕府に敵抗する者に非ずとせば何故に那珂湊に戦ひたるや曰く勇往無前、毎戦大捷、曰く自首陳情、死罪斬首、豈矛盾撞着の甚しきものに非ずやと、是れいかにも尤もなる疑問なり是れ則ち事情の錯雜紛糾せるものある所以なり、是れ幾多の原因の存する所なり是れ榊原初め幾多の志士が最も心を苦めたる所なり、余が茲に當

時の事情を攻究し其の原因を闡明し以て志士の靈を弔せんとするは之れが爲めなり。

さて水戸の立場として幕府に反抗すべからざる義あることは前來所論ほご之を言へり是れ其の事情の紛錯して進退に艱難なる第一原因なれども次には當時の大問題として多年繼續し來りし攘夷鎖港の實行を見ること能はず澎湃たる激流遂に其奔逸すべき道を失ひて爲めに堤防を崩壊し大混亂を生じたるに由らずんばあらず是れ豈之を控調駕御する大英雄の統率を缺きたるに因るか、將た之を利導善用する奇謀良策の發見されざりしに因るが、抑も又時運の未だ會せざりしに在るか、請ふ少しく之を講究せしめよ。

攘夷鎖港の是非は後世より論ずるも詮なし但此の問題たるや當時に在りては、滿世の輿論たり全國の叫喚たり則ち幕府當局者に對する大要求たるなり其の根元は彼れ幕吏が勅許を待たずして條約を締結したるに起り上は叡慮を愼し奉り國威を失墜し下は全國の公議に背き輿論に反したる結果、戊午以來幾多の波瀾を翻騰して遂に櫻田の擧と爲り坂門の事件と爲りたるなり延て文久壬戌の回復に至りて幕政の局面初て茲に一變し文久三年將軍上洛ありて茲に聖旨を奉承し攘夷鎖港の國是を決定したり而して斯く機運を改造して事の茲に及ぶまでの間には既に多大の犠牲を拂ひて奮闘惡戦せしことを記憶せざるべからず是れ全く水戸の力にて水戸は實に革新の原動力、正義の急先鋒たりしなり。

左れば水戸藩は戊午の疑獄以來既に幾多骨鯁の士を失ひ藩力既に疲弊したりと雖も其の威望勢力は卓然優越して諸藩の推重する所と爲り今や國勢回復して將軍上洛の事あるに至りては水戸の名

聲は四方を風靡し當時諸侯伯の悉く京師に會同して全國の志士雲の如く集るや皆攘夷の實行を唱へざるはなく殊に激烈なる長州藩士の攘夷熱は先づ發して馬關の砲撃と爲り更に關東の方面には水戸を推して攘夷實行の衝に當らしめんと期待せしこと亦當然の成行きなるべし水戸の有志たる者いかて此の期待に背くべき、さらぬだに尊攘の唱首を以て自任せる水戸の志士が激昂踴躍、攘夷實行を叫喚せるは豈必至の勢ならずや。

然れども寸善尺魔は世の習なり、多年水戸の藩力を盡して奮闘せし結果、今や初めて世勢を挽回し將軍上洛愈し鎖港攘夷の朝旨を奉承し既に國是は決定して實行に至らんとするに及び又復幾多の障害は茲に空湧し幕議反覆、因循躊躇、遂に其の機を決すること能はず所謂澎湃たる激流をして奔逸すること能はざらしめ遂に潰裂して逆流藩内に横溢するの己むを得ざるに至らしむ是れ元治甲子戰亂の由りて起る所以、而して此の際に於ける事情の紛糾錯雜、豈亦一朝一夕の談ならんや。攘夷論の激流既に汎濫し洶湧奔騰の勢を止むること能はず然るに因循なる幕府の堤防は之を遏めて其の奔逸すべき道を梗塞せり是の時に當り誰か能く此の必至の勢を制して潰裂することなからしむるを得んや嗚呼危機一髮、甲子戰亂の端實に此處に在り請ふ今少しく此の際の事情を語らしめよ。

初め將軍上洛、朝旨を奉承するや攘夷の期限を五月十日と勅定せられ水戸順公は將軍の歸東に先きたちて關東に下り攘夷の實効を奏すべき重命に膺れり是れ水戸の志士が皆踴躍して東下せし所以、即ち多年の宿志を實行し以て朝旨に對へ國威を宣揚するは此の一舉に在りと期したる所な

り、然るに關東に於ては此の際、生麥事件の談判に迫りて幕府の恐怖せること一方ならず洵々たる物情は京師の正論とは全く相反し因循なる幕府は空議に空議を重ね模稜姑息、決するが如く決せざるが如く、水戸の督勵刺撃切なりと雖も激論鞭撻頻なりと雖も朽木糞壻奈何ともすべからず遂に空しく期限を經過したり是れ水戸の地位として朝廷と幕府とに對し最も艱險を極めたる所なり。

若しも此の時に於て幕府遂に我が苦諫を容れ愈々攘夷の斷に出でしめば則ち成敗は兎も角も、之が爲めに時局の發展を促し彼れ幕末の慘狀をして一轉積極的方面に進ましめたるなるべし、殊に我が水藩殉難志士の如きは同じく死するまでも快く戰死することを得たるなるべし或は一轉進して維新中興の業を我より展開したるなるべし、然るに幕府の情弊は因襲既に久しく猜疑嫉惡、空論虛張、あらゆる弊竇に陷溺して竟に覺醒せず、朝命至嚴輿論激切、皆攘夷の斷を促したりと雖も彼れ幕府は遂に之を斷ずること能はざりき、是に於て我が汎濫せる攘夷の激流は何處にか發泄の道を求めざるべからず、危機既に迫る、而かも猶姑く之を支持して翌年甲子まで鎮制を保ちたるは我が藩當路者の苦心想ふべきなり。

是の時に當り水戸の要路に當り内外の聲望を繋ぎし者を大場主膳正（一眞齋）武田伊賀守（耕雲齋）とす大場は京師に在りて水戸を代表して一方の重鎮たり武田は江戸に在りて聲譽嘖々四方望を囑せり而して其の帷幕に運籌せる者原梅澤野村長谷川等奇才傑物あり其の他、奇氣鬱勃、智勇矯々たる志士、林の如く雲の如し、其の持する所は尊王攘夷に在り果決斷行に在り而かも遂に彼の因循

なる幕議を奈何ともすること能はざりき然らば彼れは如何にして機運を展進せしめんとせしか。幕情既に已に彼れが如し獨り頼む所は京師の正議あるのみ、蓋し京師に於ては此の際攘夷論最も激烈にして長州を中心とせる諸藩有志の活動甚だ盛に既に馬關に於ては外艦を砲撃して攘夷實行に着手し或は御親征の議あるに至れり是れ幕府に對する非常の刺撃にて我が幕府の英斷を促すべし第一の機會たり何となれば朝廷遂に幕府の無能を見限り御親征の斷に出づるあらば征夷將軍の職權も最早失墜し去る結果たるべければなり、是れさすが幕府も苦悶せし所にて我が志士の彼に英斷を促し且つ我が汎濫せる勢を控制しつゝ展進の機を待ちたる所以なり、然るに八月十八日の變に至りて京勢頓に一變し、七卿の西竄長州の失意と爲り幕府の因循論は再び後戻りと爲りぬ是れ汎濫の勢をして遂に潰決奔騰の已むを得ざるに至らしめたる所以、即ち翌元治甲子の戰亂を止むること能はざる第一原因たるべし。

京師の形勢既に一變して幕府の因循論は益す牢乎拔くべからざるに至れり然らば我が攘夷黨の首領は何を頼みて此の頽瀾を廻し禍機を轉ぜんとせしか、是れ殆ど困難なる問題にて既に逆境に陥りたるに相違なしと雖も然れども猶一縷命脈の存するものありしなり。

何となれば京勢既に一變せしと雖も一面は是れ權勢爭奪の結果にて長州退きて會藩之に代はりたるに外ならず殊に攘夷の御旨意は決して變らせられずとの詔命あり又水戸と關聯して一橋公並に因州備前兩池田侯の主張も亦全く攘夷に在り故に武田大場等攘夷論の首領は京變後と雖も猶確く執る所あり姑く志士を撫養鎮制して以て時機を待んと努めたり蓋し其の經營亦周密にして多方其

の方策を講ぜし也然れども汎濫溢せる激流は遂に長く停止すること能はず元治元年甲子三月に至りて其の一派は潰裂して波山舉義の激動と爲り多年鬱屈せし四方の有志は忽ち此の一面に傾注して激浪奔騰の勢を演出せり世人或は武田の心事を解せずして波山義兵の頭領の如く誤認する者あれども事實は全く之に反し武田は却て之を鎮壓するに努めたる人なり是れ彼れが地位名望當然かくあるべき筈にて武田其人よりすれば斯かる輕舉を容さず、姑く機會を待ちて大に爲す所あらんとせしなり即ち攘夷報國の精神は固より一なれども藤田小四郎等の一舉に對しては痛く之を制止したるなり然れども藤田等の決心は遂に之を止むること能はず爆然として波山に發動し茲に一大潰裂を生じたり嗚呼甲子大紛亂の開端、時運の已むを得ざる所とも謂ふべきか。

尙之を約して言へば當時攘夷の事は朝廷の盛意、勅命を以て嚴督せられし所なり勅命を奉行し攘夷を決行すべしとは壯士の絶叫する所なり、之を鎮制するは無理の方法なり、然れども當局の幕府は牢乎として攘夷を實行せざるなり而して幕府に反くことは水戸の義として爲すべからざる所なり、水戸の要路に當れる武田等の苦心其れ如何ぞや。

波山の兵は愈々攘夷の旗を翻揚せり幕府は水戸に嚴命して之を鎮壓せしめんとせり而て水戸の政府も今は之を鎮定すること能はざるに苦しめり此の時に當り更に大爆彈は水戸の内部より轟發せり是れ多年内部に伏在せし反對黨派の時機に投じて發動したるなり其の故何ぞや是れ所謂水戸の地位として幕府に對する旨義意見の衝突に由るなり爾時反對派の宣言する所に據れば曰く波山の徒は白晝兵刃を掲げて常野の間を横行す是れ幕府に對する違憲反法の舉なり水戸藩たるもの之を

討伐せずして可ならんや幕府は我が宗家なり幕府に反抗して妄りに攘夷を唱ふ豈叛亂の徒にあらずや是れ祖宗の遺訓に背く者にあらずやと、蓋し其の言明する所は嘗て會澤恒藏の立論せし所に根據し敬慕の義、排暴の論、自ら他の同情を取るべきものあり是に於て相和して應ずる者數百人、市川三左衛門朝比奈彌太郎佐藤圖書を首領として大舉南上し波山追討を標榜して幕府と結託し幕威を楯として藩政を一變し武田伊賀守等を排黜して茲に純然たる佐幕主義の政府を形成せり是れ甲子戰亂の第二原因にして榊原新左衛門初め尊攘黨の士が更に蹶然起ちて大舉南上するに至りし所以なり。

紛糾雜亂せる當時の事情を語らんには日も亦足らず此の篇は單に五十年志士の國難に殉せし苦衷を弔する爲め全く其の大筋を陳ぶる目的なれども其の大筋だけにて遂に篇を累ねざるを得ざるに至れり請ふ少く寛假して説を畢らしめよ。

さて榊原新左衛門初め尊攘主義の志士が茲に大舉南上したるは何の爲めか、將た何の爲めに其の目的を達せず蹉跎して遂に那珂港の戦を餘儀なくされ、遂に慘憺たる末後を見るに至りしが、是れ前來説きたる如く、即ち攘夷論の不成功より熱烈汎濫の勢を激し、潰決して波山の壯舉と爲り、波山の壯舉より反動して市川三左衛門等佐幕主義の大舉と爲り、遂に藩政を一變して武田等も排黜せられ大混亂を生じたるが爲めなり、即ち榊原等の目的は此の大混亂を救済して藩政を恢復し以て尊王攘夷の素志を貫達せんとするに在りしなり、而かも其の素志の貫かず目的の達せざりし所以のもの抑も何に由りて然るか。

蓋し幕府の末路、明治維新の大局面を開かんとする際に當り勤王佐幕の二主義分裂して衝突争衡せしことは列藩諸侯の率皆免れざる所なり、其の大小は同じからざれども各藩皆多少衝突あるを免れざりしこと大勢轉變の當時、已むを得ざる所なり、而して其の最も激烈なりしは水戸藩なるべし、是れ水戸藩の特色たる尊王の義と共に幕府に對する水戸の關係上、亦已むを得ざる所、又二つには兩黨各傑然たる人物に富み、各議論あり氣力あり各其の信ずる所を確持して相下らず究極は竟に干戈に訴ふに至る亦其の勢の避け難き所なるべし、之を他の藩に徴するに當時各多少の紛争ありしと雖も勤王にまれば佐幕にまれば其の一方は強大にして一方微弱なりし藩は其の纏まり速にして禍少し、然るに水戸は之れ反して双方に人物あり氣力あり而して其の争ふや共に猛烈を極め結局其の全力を竭盡して已む、則ち維新後に至りては人物索然、疲勞困頓、復た生氣を見ざるに至りし所以のもの豈其の故なからんや。

神原新左衛門初め此の幾多の志士が尊攘の大義に依りて蹶起奮闘、頽瀾を既倒に回さんと努め一身を捧げて報國の義に殉せし精神は既に明白なり、而かも彼等が蹶跌して其の志の達せざりしは即ち其の反對に立ちたる佐幕主義者の有力なりしに由らざるべからず、由來市川三左衛門等の黨與は佐幕主義を執りて多年失意の地に在り、他の尊攘論の盛なるに當りては姑く寂然として形を潜めつゝありしものと如し、然るに幕府因循遂に攘夷を斷せず攘夷論往き詰りて京勢竟に一變し、汎濫の勢、發して波山舉兵に至るや彼れ市川等の黨は先づ幕府に投合せり既にして波山末流の行動は往々惡聲を傳播し幕府は益す之を疾視せり是に於て彼等は敬幕討賊の義を標榜し其の蹶然と

して起つや迅雷疾風の如く他の尊攘黨をして愕然驚倒せしめたり而して彼等は先づ深く幕府に結託して其の根據を必勝の地に置けり故に其の南上するや先づ幕府の大援を得て立ろに藩政を一變したり其の勢力豈侮るべけんや。

余は市川其の人が果して一世の奸雄なるや否やを知らず然れども其運謀決策機宜に的中し而して其の勇猛果斷なる決して侮るべからざるを知る、思ふに彼の黨中自ら機略魁奇の士あり隱然運策、着着功を奏せしなるべし此の際の事情、豈亦近世史中の一奇觀たるなからんや。

更に之を一方より考れば市川三左衛門等が如何に一世の奸雄なりしにせよ其の幕下に勇士多く部内に謀士ありしにせよ彼の有力なる尊攘黨を一舉に顛覆して藩政を一變すること手を齟へすが如くなりしとは少しく奇異の感を免れざる所なるべし然れども是れ當時の實情の然る所則ち實力政府たる幕府の積威が猶如何に大なる力ありしかを想見すべし而して彼れ市川等三將が其の幕府を楯として壓迫せし機略の如何に効驗ありしかを想見すべし是れ彼等が一舉して王手を指し死命を制する勢ありし所以なり。

抑も彼れ市川等は如何にして斯かる辛辣手段を弄し得たるか是れ他なし其の舉頗る機宜に適中し幕府に對し納約自牖の妙を得たればなり、何となれば當時幕府の波山勢に對する惡感に既に極點に達したり幕府は既に水戸に對して愛相をつかしたり然るに折りから水戸の内部より市川等が敬幕の誠意を表し自ら進て波山追討に任ぜんと請ひ數百の勇士を率ゐて南上せし一舉は如何に幕府を感動せしめしぞ、幕府は此に至りて扱ては水戸にも頼もしき一勢力の存することよと激賞し深

く之を信賴したりといふ、是れ市川等が堅く彼れに結び先づ必勝の地を占めたる所以なり則ち其の破竹の勢を以て藩政を一變せること偶然ならざるを知るべし。

然れども彼れ市川等は既に志を得るに及て其の勢の激する所、遂に軌道を脱出せり、即ち彼れは既に幕府の強援を得て藩政を一變し己れ自ら政權を執るに及び首として武田伊賀守を黜けたるのみならず之を罪して死に致さんと迫れり是れ豈極端より極端に走るものに非ずや、蓋し彼等の謂ふ所は武田こそ波山勢の頭領なれ彼を措て波山を討つは本末を過るものなりといふに在りしなるべし然れども是れ全く誤解なり、なるほど武田と藤田小四郎等との關係は親しき仲間たるなり、尊攘の主義精神は固より同じきなり、然れども波山舉兵の事は武田の深く戒めて制止したる所なり、武田を目して波山の頭領なり張本人なりといふに至りては豈誤解或は輕妄にあらずや、幸に武田は順公の内命に依りて死を免れて水戸に還るを得たりと雖も、彼市川等の佐幕主義は既に極端に走れり是れ其の大混亂を生じたる所以なり榊原新左衛門等は此の混亂を濟ひ匡正恢復せんとて起てり世人或は之を稱して水戸の内亂といひ黨争といふなるほど内亂には相違なきなり然れども之を目して黨争とするは豈酷評ならずや、彼れ市川等の舉措既に極端に走れり然れども彼れも亦本來幕府を宗家として敬事するを正義と信じ其の性既に先天的に固着せし者なり故に彼等の眼に映ずる尊攘黨の行爲は違憲反法と速断せざるを得ず、則ち其の武田に對する感情の如きも人間の弱點より起れる誤解とも謂ふを得べけん、況て尊攘黨に至りては其の行爲は或は過激を免れずとするも其の主義精神たるや全く盡忠報國に外ならず而して意見議論は全く相反するなり故に其

の相争ふや衝突激昂、或は常軌を逸するの觀なきに非ずと雖も本來は主義政見の衝突に出づ則ち勤王佐幕の衝突なり急進保守の政争なり、是れ水戸藩の地として免れざる所たるなり豈之を私黨と謂ふべけんや。

尙之を分解すれば勤王黨の中にも激派と鎮派とあり佐幕の中にも亦自ら徐破急あり彼れ市川等は佐幕主義の急なるもの、波山勢は勤王黨の激なるものなり而して榊原等の一團は尊攘黨の穩健なるものとも稱すべきか然れども若し勝敗の數よりいへば後者は殆んど不利の地に立ちたるものなり更に之を大局面より觀れば、武田大場は尊攘黨の飛車角なり今や飛車角隔絶して乗り出すべき機なく佐幕黨の三將進て王手を指しぬ榊原等大舉南上すと雖も此の局面を如何に展開せんとするや請ふ更に當時の形勢を一觀せよ。

榊原新左衛門は先づ大久保(執政)鳥居(家老)等と先登江戸に上りたれども反對黨の爲めに逐はれて退却し、續きて諸番頭を初め大舉南上したる志士は彼の幕府を後援とする反對黨の爲めに千住松戸等の關門を閉鎖され江戸に入ることを得ず爲めに空しく小金驛に屯集せり彼れ反對黨が着着先を制したること斯の如し、然れども一方水路より南上せし戸田、藤田の一黨は首尾よく江戸に入り響響盡議、遂に朝比奈佐藤等を黜け同時に小金驛に大屯集せる集團を擧げて江戸に入らしめ竟に再び藩政を回復することを得たり、但し市川三左衛門は此の際既に波山追討の軍を率ゐて出發したる後なり故に朝比奈佐藤は黜けられたれども市川は猶執政の職權を有し且つ陣將として兵馬を一手に握れり是れ彼が猶勢力ある所以豈流星光底逸長蛇の觀あらずや。

斯くて江戸に於ては一旦恢復の功を奏したれども市川等の追討軍は此の際既に幕軍の先鋒と爲りて波山に進軍し茲に佐幕と勤王との兩極端の銳鋒は愈々接近し七月七日初めて高道祖原に衝突し同九日拂曉波山軍の驍將は突進襲撃を以て大勝を博し市川等は敗退して一旦江戸に引き揚げんとする折から茲に料らずも江戸より朝比奈佐藤等が排斥されて北歸し來るに逢着し是より三將一團と爲りて迂路水戸に還り恰も尊攘黨が水戸を虚にして南發したる後に乘じ今は水戸城に據りて更に抗爭すべき方略を講じ尊攘黨は却て根據を失ひたる形となれり是れ遂に大衝突を免れざる所以なるべし。

紛々紜々亂れて麻の如しとは此の時の謂ならんか、水戸は今や大波瀾、大混沌の状態に陥りたり此の時に當り水戸の名士には遂に之を救済すべき良策なかりしや魁偉奇傑の士も遂に空しく手を束ねたるにや如何、曰く是れ策なきに非ざりしなり、尊攘黨の幹部には元より奇才俊傑多し豈徒らに控手して望觀せんや、但し此の奇策が僅かに時日の遅れたるを以て成功の機を失ひしは返す／＼も之を天運といふの外なきなり。

然らば其の策とは如何、曰く此の策たるや當時機密の間に埋れりたるものにて當時の遺老と雖も幹部の議に預りし者の外は恐らくは聞知する機會なかりしなるべし、余嘗て故男爵山口正定に招かれ一夕其の實歴談を聞けり今其の談話中此の時の事に關する槩畧をいはんに山口は當時目附の職を以て京師に有りしが時事の切迫に及び急行東下せり時恰も水戸の大波瀾奔騰に際會し反對黨の耳目を避けて江戸の因州藩邸安達清一郎の家に寓せり七月中旬と覺ゆ野村長容川より書簡あ

り某旗亭に會見せり二人曰く水滸の紛擾、既に此に至る是れ豈尋常手段にて解決する所ならんや、今日の策は専ら京都の重命に依りて之を鎮定するの外、他に施すべきの術なかるべし因りて之を京師に奏し特に鎮東勅使の東下を請ひ之を以て藩内の紛擾を鎮定し兎も角も藩力を纏めて國家に盡瘁せざるべからず君盍急行西上して此の事を謀らざると、是に於て山口は之を諾して直に出發し急行兼程、夜を日に繼ぎて轡を飛したり然るに愈々京師に近づくに及び物情紛々或は死屍を擔架し來るに逢ふ何事ならんと聞くに是れ所謂甲子七月十九日の大亂、即ち長州犯關と稱せらるゝ當時の大事件なり、此の擧や京都の大部分は兵燹に罹り長州の久阪義助、筑後の真木和泉守等攘夷黨知名の士が多く戦死したるは此の時なり。

左れば大戦後の京師は旁午狼籍、鎮東勅使などは及ぶべくもあらず殊に攘夷黨の勢力は去年來再度の敗と共に不振に傾き遂に影響を關東にも及ぼすに至れりといふ是れ亦時運の然る所か。

人或は疑つて言はん鎮東勅使の東下を請ふは果して濟時の良策なりといふに足るか若し其の策をして成らしめば果して水戸の戦亂を鎮定し得たるや否やと、是れ固より疑問なり、然れども若し鎮東勅使の東下を見るに至らんには鎮定の効を奏すること必しも難きに非りしなるべし、假し全く鎮定とまで運ばざるとも苟も勅使の下降とあらば水戸城南吉田の衝突は免れたるなるべし、苟も此の衝突なくば何ぞ神勢館の戦あらん、何ぞ那珂港の戦争あらん、榊原初め悲惨の最後には及ばれざりしなるべし何となれば水戸はさすが尊王の唱首なり藩士たる者、たとひ佐幕主義を取る者と雖も敢て尊王の義を無視することあるべからず、彼れ市川等も波山勢の激動に對してこそ反

對の激動に出でたるなれ、苟も勅使とあらば抗争すべき理由なきなり、故に鎮東勅使を奏請せしは濟時の良策たるを失はざるなり、然るに折りも折り恰も京師の大戦に際會し其の功を奏せざりしは時運の然る所か、況て京都戦亂の結果は關東へも反響して攘夷黨の失意と共に幕府は益々迫討に銳意し市川等又水戸城に據りて幕府と呼應し兵力を以て抗排せんとす是れ神原等の大集團が目代大炊頭の麾下に従屬したるに拘はらず遂に波山勢と同一の者と目せられ疑似の間に反對黨の乗ずる所と爲り遂に戦鬪を除儀なくせらるゝ破目に陥りたる所以なるべし。

余は前きに水戸の戦亂に關して三ヶの款問を掲げたり曰く斯く紛亂を生じて拾收すべからざるに至りしは是れ大英雄の統率を缺きたるか、將た奇謀良策の之を濟ふなかりしか、抑も又時勢天運の然る所かと、夫れ内亂の本源は攘夷の不成功に在り、若しも攘夷の實行あらしめば舉國一致は勿論なり、彼れ市川等の如きも一方の勇將たるを疑はざるなり、況や尊攘黨志士に於てをや、惟其れ攘夷の議、決せず斷ぜず、是に於て激派の鬱勃を禁ずる能はざるなり而かも猶能く之を鎮撫して久しきに互らしめたるは武田大場等の力にあらずや、大場は一方の重鎮たり志士の重力たり、武田の名望に至りては四方の有志、之を望むこと泰斗の如く之に従屬する志士劍客雲の如く林の如し豈統率の才なしとせんや、而かも竟に藤田小四郎の決舉を止る能はざりしは時勢已を得ざるなり。

誰か成敗を以て英雄を論ずる者ぞ、他日西郷隆盛も又彼の私學校徒の血氣を制する能はず、遂に少壯の士と與に城山に死したるに非ずや、武田は初め少年志士の輕舉を鎮制したり然れども終り

は與に敦賀の露と消えたるなり、勢の趨く所は書生の紙上に論ずる如くなる能はざるなり、是に至り第一問は否定し得べきなり然らば奇謀良策は果して如何、曰く良策としては攘夷斷行より良策なるはなきなり、然れども其の策の行はれざりしは當時の實情なり、是れ攘夷變じて鎖港と爲り、鎖港變じて休商と爲る、當時の幕議變遷の跡を尋ねれば實に幾多謀臣志士の苦心盡議せし血痕を認むべし、若し夫れ破裂後の奇策に至りては鎮東勅使降下の策を取らざるべからず、而して其の策、遂に時機に會せざりしなり是に於て第二問も又通過して竟に第三問に歸着せざるを得ざるなり。

嗚呼神原初め幾多の志士は斯くの如き運命の下に盡瘁せり彼等の一團は多く名門士分を集合せり其の精神たる飽くまで盡忠報國を以て充たされたり而かも其の行動は穩健なりき、然るに其の满腔の熱血をして之を攘夷の舉に濺がしめず、空しく之を蕭牆の内に濺がしむ、叙して茲に至れば唯悲風の颯々たるを覺ゆるなり。

以上の所記は全く後世より觀たる史上の大勢なり即ち後世より觀ればこそ、史上に就て觀ればこそ、其の原因結果も明かに、大勢の趨く所も考察し得るなれ、其當時に於て其の渦中に在りては、いかて能く其の大勢を推し機運を察し豫め其の成行を見破し得べき、吾人をして當時に在らしめば管に大勢を觀察すること能はざるのみならず、寸前暗黒、唯自己の所信に従ひ其渦中に彷徨するの外あらざりしなるべし。

されば史上より觀たる形勢は既に斯くの如しと雖も、神原初め幾多の志士は何處までも正當の順

序を履み目代松平大炊頭の麾下に屬して大舉水戸に還り速かに鎮定の功を奏し藩力を擧げて尊攘の大義に殉せんと期したること當然の經道たるべし、然るに事、志と違ひ市川等は既に水戸市に據りて抗拒し目代の重命を以てするも入城すること能はず柝格齟齬遂に城南吉田臺に衝突するの已むを得ざるに至る、嗚呼亦時運の否塞之をして然らしむる所か、但大炊頭が目代として水戸へ下向を命ぜられたるは七月晦日にて之と同時に家老鈴木縫殿は京都大戦の爲めに天機伺ひとして上京の途に就き、時の參謀ともいふべき野村繁之介長谷川作十郎之に隨行せり、是れ先きに山口正定をして上京奏請せしめたる鎮東勅使の事を成功せしめんとの底意に出でたるなるべし、爾時京都戦後の混雜は其の策をして成立せしめず又水戸に於ては既に干戈を動かすの已むを得ざるに至りしと雖も他年戊辰復古の大革新に際し家老鈴木縫殿初め在京團體が勅を奉して東下し遂に恢復の功を奏する所以のもの則ち此の鎮東勅使の策の竟に成功せしものとも見るべく則ち野村長谷川等の運籌機畧自ら卓然たるを見るべし。

さて城南吉田の衝突は甲子大戦争の開端なり此の事に付ては城兵は吉田臺より發砲したる爲めに應戦したりといひ吉田方にては下市口より砲撃したるが爲めに應戦したりといふ其の發砲の前後を論ずるは猶伏見鳥羽の戦争に於ける如く殆ど水掛論に近し苟も大體より論ずれば縦ひ如何の理由あるにもせよ藩主の目代として下向せし大炊頭に對し入城を拒むの理あるべからず是れ固に論を待たざる所なり然るに市川等の主張は彼が武田に對する論法と同じく「波山の暴徒は天狗なり、武田は天狗の首領なり、故に武田を死に處すべし」といふが如く今や目代の下向に對しては敢て之

を拒むに非ずと雖も然れども目代は天狗を率ゐ來り故に入城すべからずといふに在り而して彼等の所説は幕府と相通じ彼れは既に頼む所ありて抗排を敢てせしものと如し。

神原初め幾多志士の執る所は尊攘の大義なり、而るに反對黨は總て之を名づけて天狗と爲しぬ、則ち目代に従屬せし神原等は元來波山勢と同じからずと雖も反對黨は總て之を天狗の名稱の下に一括し去りしなり、是れ神原初め志士の心外に思ひし所憤慨に堪へざる所なりき、而て此の憤慨は遂に神勢館の戦と爲り延て那珂港附近諸方面の戦と爲れり、而して其の戦線の延長するに隨ひ波山勢も又來りて應援し遂に疑似の間に市川等の言ふ所をして實事に近からしめ遂に幕府の大軍を以て之を攻圍するに至れり是れ神原初め空しく窮厄の破目に陥り忠憤を懷き冤を呑みて竟に陳情の擧に出づるの已むを得ざる所以なり、何ぞ其の無念なる何ぞ其の痛恨なる。

然りと雖も是れ單に後世より史上に就て觀たる成行なり、若し夫れ當時の實境を踏みたる者よりして言はしめば豈單に此の如きに已まんや、凡そ此の際の形勢たる内外多事、議論紛淆、幾千百人の志士が各智を盡し勇を奮て奔走執掌せしもの元より一朝一夕の談にあらざるべし、而も其の結果竟に斯の如きに至りしは是れ所謂時運の然る所といはんのみ。

那珂港を中心として前後各方面に演出せし幾多の戦争、或は奇才俊傑の活動奮闘せし壯絶慘絶なる史蹟は今敢て之を言はざるべし、但茲に一事の言はざるべからざるは部田野の大戦是れなり何となれば是れ前にも言へる如く矛盾の疑あればなり。

抑も神原等の陳情には幕府に對しては抗敵する者に非ずといふ、然らば何故に幕軍を遣へて大戦

闘を敢て爲したるか、是れ殆ど撞着矛盾を免れざるに似たりと雖も然れども亦自ら一面の理由ありて存するなり、夫れ榊原初め幾多の士が目代大炊頭に從屬して水戸に還りたるは藩内を鎮靜し一致戮力以て尊攘の大義を貫達せんとするに在り其の義の正しく道の順なる、誰か之れに反抗すべき、一藩肅然之に服従すべき筈なり、然るに反對黨なる市川等は無法にも目代の入城を拒みて波山勢と同視し、一槩之を目して天狗と爲し天狗は則ち賊徒なりと稱し毎に攻勢を取りて迫り來り遂に開戦を餘儀なくされたり而して我が彼れの無法を怒りて開戦せし結果は遂に波山勢と連りて疑似の間に彼をして賊名を濫用せしむるの便を與へたるものゝ如し、而して彼は終始幕府の大援に頼りて我を苦しめ、居然水戸城に據りて主客の勢を把持せり、是れ所謂城狐社鼠、我毎に彼の爲めに譟弄せらる、我が盡忠報國の誠、遂に彼が爲めに賊視せらる、無念……心外……我が忠憤慷慨、市川等を惡むの念いかてか禁すべき、我は敢て幕軍を敵とする者に非らずと雖も然れども彼れ市川等の來攻に及びては飽くまで決戦して之を打ち懲さんと焦思せしこと亦當然の勞ならずや。

然る折から茲に幕軍に非ざる市川等の兵と部田野に會戦するを得たるこそ好期なれ、其の次第如何といふに那珂港對岸なる磐船山の幕軍は既に目附戸田五助の約諾を以て大炊頭の出府辨明を導きたるのみならず大炊頭出發後の消息は我未だ之を知るに由なかりしに戸田五助は爾後休戦を約して幕軍より攻撃することなき旨通じ來り然るに之れと同時に部田野方面よりは頻りに攻勢を取り十月十日の拂曉部田野の敵は大舉來侵せり是に於て榊原總督は以爲らく幕府の軍既に休

戦を約し而して今此の事あり是れ予彼の無法なる市川の兵なれ、是れ我が思ふ所の好敵なり、いてや思ふ存分彼を打ち懲さんとて茲に總軍選戰を令したり是れ部田野の大戦に我が軍の大勝を得て敵兵を落葉の如く打ち捲りたる所以なり、即ち敵將市川三左衛門が部田野の戦に砲彈をうけ自傷したりといふは則ち此の日の事なり亦以て彼が苦戦を想ふべきなり、然しながら彼れも亦水戸の家老なり陣將なり、而かも自ら陣頭に立ちて奮戦自傷するに至りしは敵ながらも天晴勇將たるを稱せざるべからず。

部田野の大戦は斯の如き次第にて開かれたり是れ十月十日の事にて此の後十七日十八日の二回大戦あり敵軍益々増加して我に十倍せしに拘はらず毎戦皆我が大捷を以て敵兵を震怖せしめたるは事實なり、然れども此に至り敵軍の市川等の兵のみに非ずして幕軍諸藩兵の参加せしことは其の兵數の益々増加せるを以て知るべく又我が軍に於ても波山勢潮來勢等の全部之に参加したるは勿論なり即ち波山勢の驍將飯田軍藏の負傷せしも此の最後十八日の戦なりき、要するに事既に此に至るや机上の理窟を以て論ずべからず紛々勢の趨く所自ら然るのみ、唯此の熱血をして攘夷の爲めに濺かしめず空しく之を蕭牆の内に濺きたるを悲むなり。

那珂港の戦争は毎に榊原軍の勝戦たり然らば何故に陳情の擧に出でたるか、是れ幕府に敵抗する者に非ることを表明するは勿論、二ツには幕府に於ても殆ど處置に苦み之が爲めに多大の犠牲を出すを憂ひ榊原等も今は素志の齟齬して空く幾多の生靈を亡ふことを悲み、縦ひ身は重職の責として罪を受くるとも、せめて多數の生靈を濟ひ他日國家の用に供せしめんとの誠意に出たるなる

尊攘といひ佐幕といふ本來對國家的意見の異同に外ならずと雖も兩黨衝突の極は相敵視すること
仇讐の如きに至る亦已を得ざる勢なり而して兩黨中にも兩極端と中和性との相違あり、波山勢と
市川勢とは兩極端にして到底火花を發せざるを得ざれども榊原等は尊攘黨の穩健なる者にして又
磐船方面の幕軍に屬せし戸田の部隊は反對黨といふよりも實は殆ど同主義の士なり、是に於て僅
かに一川を隔つる兩軍は中和性の接近しつゝありしこと即ち陳情自首の導火たる所以なり、是に
於て幕府の歩兵頭平岡都築等之が然諾を與へ榊原は富田福地等重立たる諸將と熟議し與に多數の
生靈を濟はんとの優さしき情と然諾を重ざる武士道の信條とに依りて自首陳情の運びには至りた
るなり然れども兩極端なる波山勢と市川等とは到底相容れざれば波山勢は武田山國等の老將と與
に重圍を破りて西上し、一方市川三左衛門等は戦後の餘威を振ひて他の穩健説を容れず遂に極端
なる辛辣手段を執りて天狗狩と稱し其をして子遺なからしめんとせり是に於て戸田藤田等中立の
士は遂に皆獄に投せられて、復た榊原等を救済する者なく、あはれ榊原初め幾多の志士は遂に慘
痛なる末後を見るに至れり、嗚呼曠昔は千軍を叱咤せし尊攘黨の名將勇士、今や空く千古の冤を
呑みて告ぐるに道なきに至る、余は嘗て福地政次郎の幽囚中の記を讀みて彼等幾多忠勇の士が楚
囚正冠、尙耿々の氣に滿てるを歎し又其の慘楚辛艱無限なる厄窮の情況を想ひ轉た涕淚の滂沱な
るを禁ずる能はず、古河城外暮鐘聲幽なる邊基烟漠々鬼火の悽涼たる當時を追懷せずんばあらざ
るなり。

甲子戦亂後の慘状は既に此の如し此の慘状後の水戸は一時市川等の全盛時代となり尊王の名藩も
一時は佐幕黨の水戸と爲りぬ、而して其の主義如何は兎もあれ水戸の藩力は既に一半を失ひて大
病後の状態に陥りたり幾くもなく王政復古、維新の初に至り在京尊攘黨の團體は勅書を奉じて東
歸回復の功を奏し市川等は相率ゐて脱走會津に投じ奥羽佐幕軍の一角に勇名を振ひたり然れども
彼れは會津落城に及びて據る所を失ひ再び水戸に侵入し弘道館に據りて水戸城に對し茲に最後の
決戦を挑み兩黨百戦後の餘勇を奮ひ猛烈なる接戦の結果市川朝比奈等の將士は竟に全滅し城兵も
亦知名の士鮎澤伊太夫以下數百人の死傷を出し大病後の水戸をして更に大切開、大手術を施さし
めたり而して此の大悲劇の幕を閉ぢられたる時は世は既に一轉して明治維新の新舞臺となれり。
此の如く専ら國家の爲めに全力を竭盡し熱血を濺ぎ盡したる後の水戸は人才も乏く金穀も空しく心
身全く疲憊してヒステリー症に罹り時局既に一轉したるに拘はらず復た起つこと能はざる状態と
なれり所謂水戸藩末の慘劇とは此の謂なり、嗚呼悲慘なる水戸の歴史、之を知る者は誰か明治維
新後の水戸の不振を怪まんや、其の不振は當然の結果のみ、是れ然しながら全力を國家に貢獻し
たる爲めなり、明治維新の澤に浴する薩長諸藩の元老等は水戸の墳墓に參拜して可ならん。

344
430

大正三年六月三日印刷
大正三年六月八日發行

編纂兼
發行人 菊池孝

水戶市上市備前町八百四十八番地

印刷人 向後宇之輔

水戶市上市大坂町五番地

印刷所 盛文社活版所

344
430

終

